

改訂版 (2012. 1. 22)

エピソードの散歩道

平賀壯太

プラス

六日町高等学校 7 期生

商業用転載を禁ずる

電子図書

エピソードの散歩道

目次

「スキー」シリーズ	4
高校時代のスキー	4
スキーと神経痛	5
アメリカ人のスキー	5
スキー場での可笑しな話	6
スキー場での事件	7
「海外旅行」シリーズ	8
トレヴィイの泉	8
ブロードウェイ	9
ホテル	10
チップ	11
キエフ空港にて	11
ムルマンスクの大韓航空	12
サハリンの大韓航空	12
ベルリンの壁	13
ベルリンの壁の崩壊	14
マンチェスターでの英国微生物学会	14
ストラスプールでの記念式典	15
国際研究集会と蝶採集	16
モノ湖	17
アメリカの交通規則	19
サンディエゴとジョシュアツリー国立公園	20
美術館と博物館	21
国際研究集会とリクレーション	23
アトランタの米国微生物学会	23
砂漠乾燥地帯のドライブ	23
サンタ・フェでの最後の国際研究集会	24
グループ観光旅行	27

「変なアメリカ人」シリーズ	28
アメリカ人と地球温暖化	28
アメリカ人と進化論	29
アメリカ人と自動車ショウ	30
アメリカ人と日本文化	31
「魚釣り」シリーズ	33
魚釣り事始め	33
大物釣り	34
ホヤのサシミ	36
コイ釣りとアユ釣り	36
投網	37
艀の船	38
魚の研究	39
釣りの楽しみ方	41
「終戦日」シリーズ	42
終戦日の日本軍戦闘機	42
湯本三郎さんの「終戦の日」	41
高橋一哉さんの「終戦の日」	43
平賀壯太の「終戦の日」 1	44
原澤正さんの「終戦の日」	45
上村文平さんの「終戦の日」	45
平賀壯太の「終戦の日」 2	46
海行かば	47
軍国主義教育	47
「変なアメリカ人」シリーズ (続)	49
アメリカ人と枯葉剤	49
アメリカ人とベトナム人	51
アメリカ人とイラク戦争	53
あとがき	56

「スキー」シリーズ



高校時代のスキー

一人で「上ノ原」のスキー場で滑っている時に若井敏彦君に会い、誘われてますがたやま 栢形山の頂上まで登りました。若井敏彦君が裏にアザラシの毛皮を付けたスキーでまっすぐに登っていく後を、「ハの字型」開脚でもたもたと付いていきました。やっと頂上についたのですが、帰りは大変でした。当時回転ができなかったので、山の斜面を斜めに横切り一直線で滑り、転び、そこで方向を換えてまた一直線に滑り転ぶことを繰り返してやっと降りてきました。優雅なクリスチャニアで滑り降りた若井敏彦君はあきれて見ていたことでしょう。実力の差をまざまざと見せつけられた一日でした。

(2011. 11. 4)



六高の校章の雪景色

スキーと神経痛

高校卒業後、長い間スキーはしていませんでしたが、30才台の中頃、京都大学ウイルス研究所の研究室の全員で長野県の^{つがいけ}樽池スキー場に2泊3日の合宿に行くことになりました。新潟市出身のスキー好きの院生の発案でした。

当時、私は酷い座骨神経痛を患っており、常に患部をいたわる姿勢をしていたために背骨が曲がってしまっていたのです。神経痛には寒さが大敵ですので、痛み止めの薬を飲みながら、しぶしぶ参加したのです。

リフトで登って最初に滑ったときに、尻を強く打ちつける酷い転び方をしてしまい、激痛で意識が遠のき、これで最期かと思いました。

ところが、この転倒で6年間続いた神経痛はすっかり無くなってしまい、3日間楽しく滑りまわりました。そして、このときに初めてクリスチャニア（もどき？）が出来るようになったのです。

それ以来、座骨神経痛で苦しんでいる人を見ると、「スキーに行って転んだら治りますよ」と勧め、その人を^{ふる}震い上がらせております。

(2011. 11. 5)

アメリカ人のスキー

15年程前のことですが、アメリカのニューメキシコ州のサンタフェ（Santa Fe）で開催された国際研究集会（ワークショップ）に出席しました。サンタフェはアメリカインディアンの住居スタイルを真似た家が並ぶお伽の国のような小さな美しい町です。宮沢りえのヌード写真集でも有名です。

半日の自由時間に近くのスキー場に行き滑ってきました。標高3000～4000メートルのスキー場は雪質が良く、山全体が広大なスキー場でしたがスキーヤーはまばらにしかいませんでした。

奇声をあげながら、スキーで針葉樹林に突入して、木々の間を滑って行く冒険野郎たちには驚かされましたが、それよりも驚いたのは両足が無い身体障害の男が椅子の付いた1本スキーに乗り、猛烈なスピードで横を追い抜いていったことです。

アメリカ人のチャレンジ精神には脱帽しました。

(2011. 11. 5)

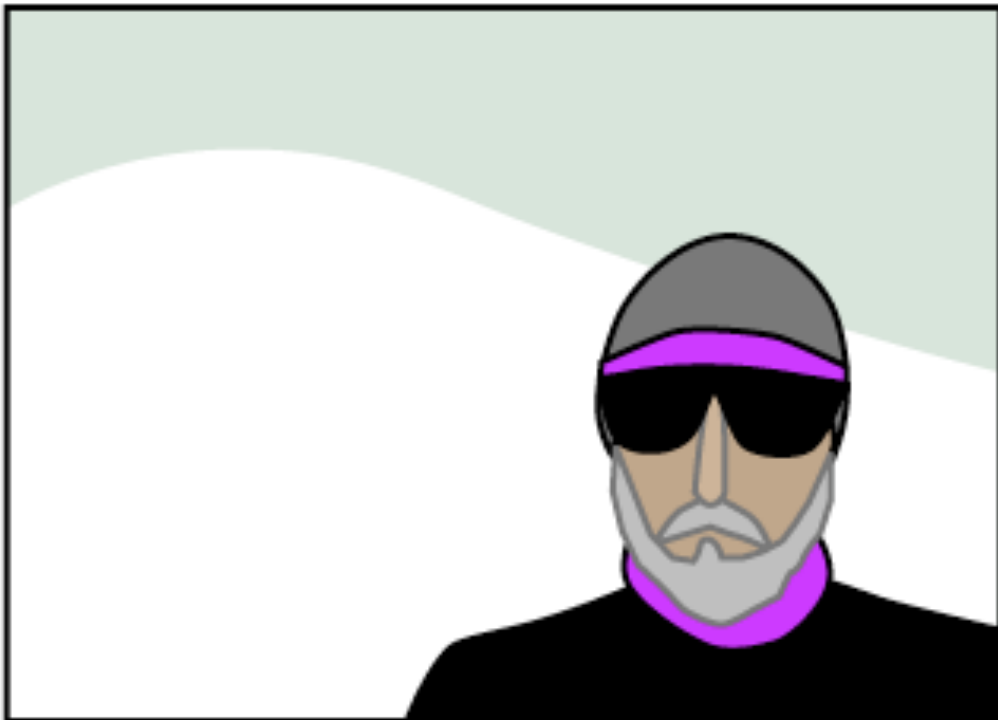
スキー場での可笑しな話

皆さんは九州ではスキーなど出来ないと思っていないですか。意外にも熊本県と宮崎県の県境に樹氷が見られるスキー場があります。熊本大学の教授をしている頃このスキー場にはよく行きました。

ある日、ゲレンデを回転しながら滑っているときに横からヨロヨロと滑ってきた若い女の人と接触してしまいました。二人の足が絡まり、スキーは雪面に突き刺さってしまい、股と股が密着したまま、にっちもさっちもいかなくなりました。女の方は悲鳴をはいあげましたが、屈強な男たちに助けられるまで、二人はゲレンデの真ん中でこの^{エッチ}Hの恰好で絡まったままいたのです。幸い二人とも怪我はありませんでしたが、大勢の人の前で物笑いになってしまいました。私はもう少しこのままの恰好でいても良いと思っていたのですが、残念ながら助けられてしまったのでした。

こんな失敗談なら、自慢でないですが、いくらでもあります。皆さんは、こんなしょうもない話は聞きたくないでしょうか。それとも、「他人の失敗は蜜の味」でしょうか。

(2011. 11. 5)



アメリカのスキーヤー

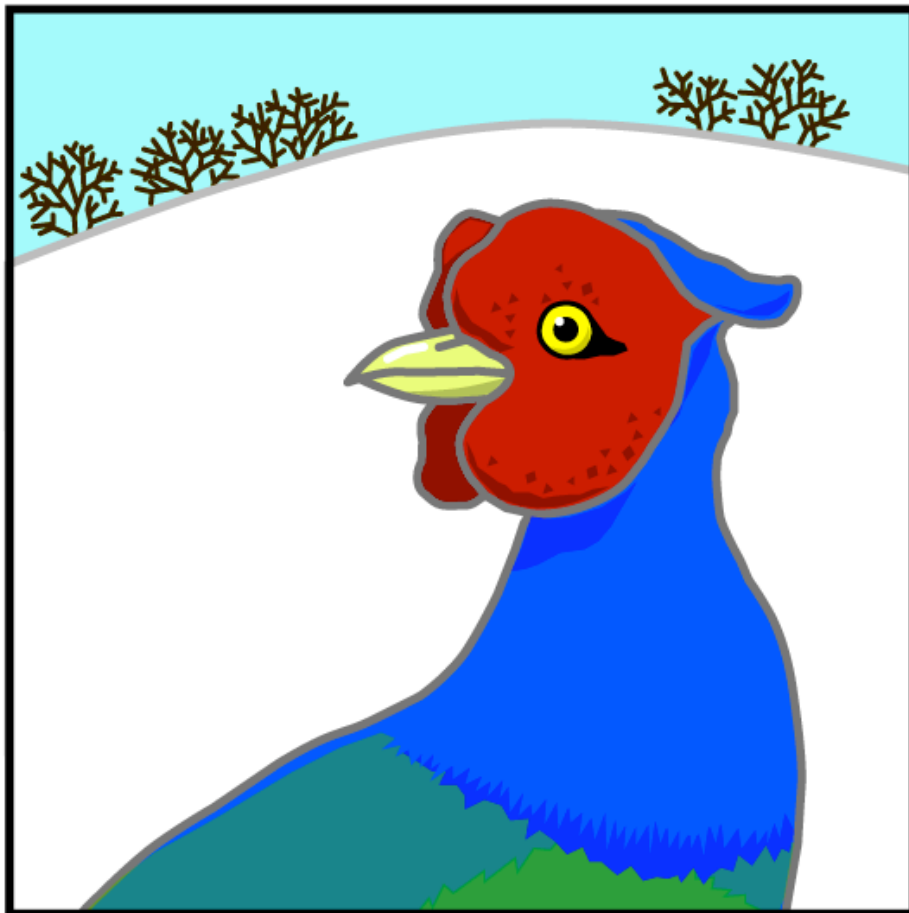
スキー場での事件

今度はシリアスな話です。親しかった京都大学の院生の話です。

京都市と琵琶湖の間の山脈のスキー場での出来事です。或る女性が転んだ拍子にスキーを山の斜面に流してしまい、「誰か取って来て^{なだれ}ェー！」という悲鳴に、親切な彼はスキーを追って斜面を滑りおりました。ところが表層雪崩が発生して、彼はそれに巻き込まれてしまいました。その女性は泣き崩れたということです。

翌春の雪解けまで、彼の死体は発見されませんでした。

(2011. 11. 6)



雪山のキジ

「海外旅行」シリーズ



トレヴィの泉

三十数年位前のことですが、イタリアのミラノでの国際研究集会の後、一人でローマ観光をしました。

トレヴィの泉に腰掛けて地図を見ていました。高い丘の上に見える大きな宮殿に行く道を探していたのです。そのとき、イタリアの俳優マストロヤンニに似た紳士が「自分はフランスから観光に来たのだが、あの丘の上の宮殿に行くにはどうしたら良いですか？」とフランス語なまり訛の英語で訊いてきました。二人で地図を覗いているうちにトンネルのある道を通って登って行けば良いことに気が付きました。トンネルのところには道の色がついていなかったため、道が行き止まりのように見えていたのです。それで、二人で出発しようとした時に、彼に「あんまり暑いからバーで一杯飲んでいこう」と誘われましたが、ハッとしてそれを辞退して彼とは別れました。

それは、開高健かいこうたけしの随筆を思い出したからです。開高健と朝日新聞の記者が二人でヨーロッパ旅行をしている時に、ローマで日本語を話すイタリア人に会い、意気投合して飲み歩くうちにその男に連れられて入った「ぼったくりバー」で大金を巻き上げられてしまった話でした。そのため、二人は朝日新聞社から送金されてくるまで、アフリカに渡るスケジュールを延期しなければならなくなったそうです。

その随筆によれば、日本人をターゲットにしてだましてやろうと思う者は、そのためにわざわざ日本語を習うのだそうですから、たまりませんね。フランス語なまり訛の英語も、ちょっと英語ができる日本人をだますにはうってつけです。そもそも、道がわからなければイタリア人に聞けば良いのです。なにも観光名所に腰掛けて地図を広げている日本人などに聞くことはないのですから。

海外旅行は危険がいっぱいです。

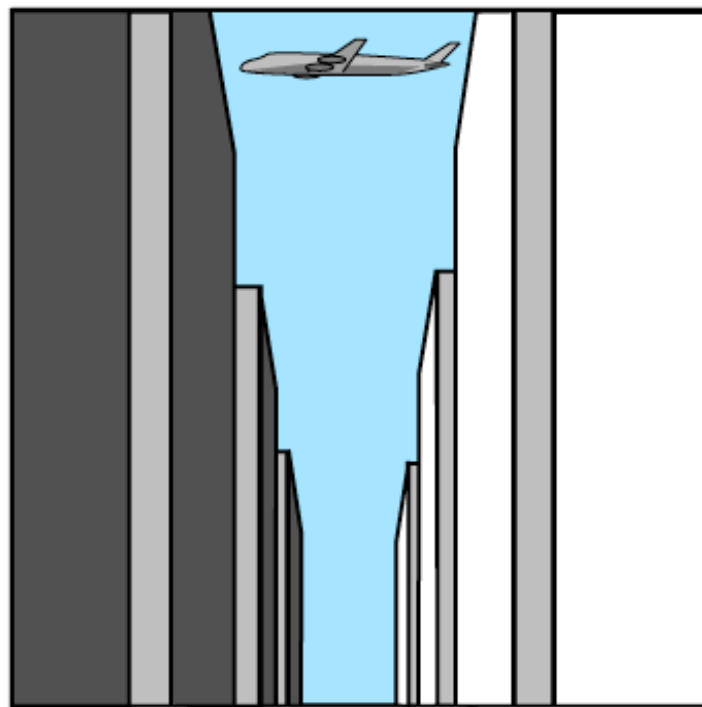
(2011. 12. 1)

ブロードウェイ

ニューハンプシャー州での国際研究集会のあと、ニュージャージー州の大学にセミナーに行く間の週末にニューヨーク見物をしました。

ミュージカルを観たあとで、ブロードウェイをぶらぶらしていた時に、人ごみの中を歩いてきた浮浪者が私の前で接触もしないのに、手に下げているスーパーのポリ袋をポトッと落としました。すると黒人の大男が現れて「お前がぶつかったので俺の友達がウイスキーを割ってしまった。10ドル払え」と脅してきました。袋の中を覗いたら粉々になったガラスの欠片が入っていました。何回も落として粉々になった欠片のようでした。この手口は知っていたので、「もう一度落としてみたら」と取り合わずに歩いていたのですが、二人はいつまでも「10ドル払え」と付いてきました。あまりにもしつこくてわずらい煩わしいので、「ポリスに行こう！」と言ったら、2人は退散してしまいました。中には、煩わしいので10ドルくれてやる旅行者もいるので、「商売」になるのでしょう。

(2011. 12. 2)



ニューヨーク

ホテル

アメリカのベセスダ市にある NIH (National Institutes of Health, アメリカ国立衛生研究所) にセミナーに行った時には、ニューヨークからワシントン D.C. に飛行機で飛び、ワシントン D.C. のホテルに 1 泊しました。予約しておいたホテルに着いたのはちょうど会社の退社時間でしたので、ホテルの前の道は人ごみで賑やかでした。ところが、シャワーをしてから街をぶらぶら歩こうとしてホテルをでたら、人っこ一人いないのです。不気味さを感じて散歩は止めました。日本に帰ってきてから新聞で知ったのですが、その日はワシントン D.C. の中心部では黒人の暴動が起っていたのです。黒人青年に対する白人警察官の暴力行為に抗議した暴動でした。

ボストンには何回も行きましたが、あるときダウントウンを夜散歩していた時に近くで拳銃の発砲の音がしました。しかし、歩いている人たちは気にも掛けない様子でした。後で知ったのですが、そこは危険地帯で観光客が夜などに歩く所ではないということでした。

初めのころは、安いホテルを旅行会社を探してもらって泊まっていたのですが、危険な例をいろいろ知るうちに、安全のために高級なホテルに泊まるようになりました。ボストンでは高層ビルのシェラトンホテルに泊まることが多くなりました。このホテルではエレベーターで上がった階に、フロントデスクがあり、そこを通過しないと客室には行けないようになっており、セキュリティがしっかりしているようでした。ところが、このホテルでさえも、日本人が殺害される事件が起きました。部屋に入ろうとしてドアの鍵をあけた瞬間に、ひそんでいた強盗に部屋の中に押し込められて殺されてしまったのです。荒っぽい強盗殺人事件でした。

(2011. 12. 3)



チップ

ニューヨークのケネディ空港からタクシーに乗り、予約しておいたホテルの近くで降りたときに、浮浪者みたいな男がタクシーのドアを頼みもしないのに開けてくれて、チップをくれと手の平をさしだしました。アメリカに着いたばかりでしたから、あいにくポケットには10セントのコイン1個しかなく、それを渡したら、「この日本人はドアを開けてやったのに、たった10セントしかくれない」と大声を出しながら付いてくるのには閉口しました。確かに高級ホテルに泊まろうとしている一見、金持ちそうな立派な(?)紳士が10セントしかくれないのはケチですね。

(2011. 12. 4)

キエフ空港にて

スペインのマドリッドで開催された国際研究集会にパリ経由で行くときのことで。飛行機がソ連のキエフ空港に給油のために降りました。給油後、飛行機が滑走路にでたころ、私は疲れて眠ってしまいました。

1〜2時間眠った後でしょうか、目をさまして^{ねむけまなこ}眠気眼で窓の外を見ると濃霧の中を100メートル位先に飛行機が並んで飛んでいます。

「ニアミスだ！」

と叫んだら、隣の白人の紳士が笑って言いました。

「あなたが眠ってしまってから、エンジントラブルがあっただけまだ空港を飛び立っていないのですよ」

(2011. 12. 5)



ムルマンスクの大韓航空

パリでの国際研究集会に出席した帰りのことです。ドゴール空港の大韓航空のカウンター前は乗客でごった返していました。ダブルブッキングが多数あったらしくて、大勢の人が次の便に回されてしまいました。しかし、幸運にも私は乗って帰ることができました。

翌日の新聞に大韓航空の旅客機がソ連のムルマンスクの近くでソ連の戦闘機に機銃掃射を受けて強制着陸をさせられたという記事が載りました。私が乗った次の便でした。当時は冷戦のため、ヨーロッパ行きの飛行機はアラスカのアンカレッジ・北極経由でした。

その飛行機はパリを飛びたつたあと、北極海上でどうしたわけか進路を変えてソ連領に侵犯してしまい飛び続けていたのです。そこで、軍事要塞ムルマンスクからソ連の戦闘機が飛び立ち、強制着陸信号を送ったのにそれを無視して逃げ回り、戦闘機から機銃掃射を受けてしまったのでした。その機銃掃射で日本人が一人死亡しました。

このとき、日本人の乗客たちは、太陽がいつもと違い反対側にある事に気が付き騒いでいたのだそうです。韓国の操縦士たちは当時空軍の飛行士上がりの人たちだったので、強制着陸したらシベリアに強制抑留されると信じて逃げ回ったのだそうです。操縦士たちはパリを飛びたつたあと、飛行を自動操縦装置に任せてカードをしていたという噂^{うわさ}でしたが、どうして進路が極端に曲がってしまったのか不思議です。

ソ連と国交の無い国の飛行機に乗る危険を痛感して、それまで安いので愛用していた大韓航空を使うのは、それ以後きっぱりと止めにしました。その心配が現実のものになったのですが、それは次回に書きます。

(2011. 12. 6)

サハリンの大韓航空

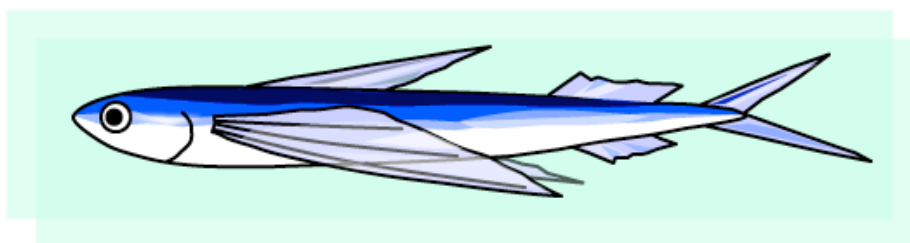
ニューヨーク発アンカレッジ経由ソウル行き**大韓航空** 007便がアンカレッジから韓国に向かっていたときにベーリング海上の航路をそれて、サハリンのソ連領内に入りこみ、ソ連の戦闘機に撃墜されてしまったという事件がありました。

アメリカ空軍のレーダーにはこの飛行機が航路を外れて飛んでいることが写ってい

たのに、それを民間の大韓航空会社には知らせることをせずに、ソ連領域に入ったら何が起こるかをじっと観察していたのです。この場所では、米国側が防諜戦^{ぼうちょうせん}で絶えずパイ機による挑発を繰り返しており、ソ連領空に侵犯した旅客機に対するソ連空軍の反応の仕方を見たかったのだと言われています。米空軍組織の冷酷さの表われでもあります。運悪く夜でしたので、旅客機は窓を閉めて光が漏れておらず、旅客機であることがソ連の戦闘機には分からなかったのだということでした。アメリカの新聞は、「ソ連空軍はアメリカの爆撃機と旅客機の区別もつかない」と揶揄^{やゆ}しました。しかし、米空軍がレーダーの情報を大韓航空に知らさなかったことは非難されるべきことです。

この事件はアンカレッジを出発する時に、自動制御システムに進路を覚えさせる数字を打ち込むときのミスだったのではないかと言う説もありますが、それを否定する意見もあります。それにしても、どうしてこの飛行機の操縦士は途中で進路が違っていることに気付かなかったのでしょうか。飛行機は自分の位置を知る機能を持っているはずです。大韓航空の操縦士たちは、またカードでもしていたのでしょうか。それとも、何か大きな謀略^{ぼうりやく}の犠牲だったのでしょうか。先に述べたムルマンスクでの事件とも関連して不可解な事件です。この事件を契機にしてアメリカの国防費は大幅に増額されたのですが、レーダーの情報を民間に知らせない軍事機構をいくら増強しても、旅客機の安全には結びつきません。当時、アメリカでは公用旅行には大韓航空を使わないことという指令が出ていたのだそうです。冷戦下で起こった悲劇でした。大韓航空には乗らないという私の決断は正しかったのです。

(2011. 12. 7)



トビウオの飛行

ベルリンの壁

ベルリンがまだ東と西に分かれていたときの話です。西ベルリンで開催された国際研究集会に出席しました。半日の自由時間に主催者側の人たちの案内で東ベルリンに観光

に行きました。

地下鉄を使って東ベルリンに入り、税関の前に並んでいたら、日本のパスポートを持つ私だけが取り調べ室に連れていかれました。日本赤軍がテルアビブ空港乱射事件を起こした直後でしたから、チェックされたのでしょう。ポケットの中のを全部出せと言われました。沢山でてきた日本語と英語まじりのメモ紙を検査官は丁寧に見ておりました。暗号文書でないかと調べていたのでしょう。無事放免された私を見て、並んでいた人たちはほっとして笑っていました。観光は滞在時間に制限のある入国許可でした。

東ベルリンの街は、歩いている人が少なく、清楚で清潔感のある街でした。そして博物館島のベルガモン博物館のゼウスの大祭壇には度肝を抜かれました。一方、西ベルリンでは夜になると派手なネオンサインが輝き、街角には娼婦が立っていたり、空港にはポルノショップがあったりして、新宿のような猥雑な華麗さがありました。東も西も、両方とも好きです。

(2011. 12. 8)

ベルリンの壁の崩壊

ベルリンの壁の崩壊後にドイツで開催された研究集会は、東ドイツの深い森の中の山小屋のようなコテージで行われました。

集会後にベルリン市内に戻ってくると当時の建築ラッシュであちこちに巨大なビルが建築中でした。日本のゼネコンの看板もあちこちに立っていました。そして大型ダンプカーが走り回っていました。ダンプカーの前面には、ハンドルと同じ大きさの大きなベンツのマークが付いていました。

それを見て、テレビのジョークを思い出しました。

「ドイツ人は金持ちだ。ダンプカーの運ちゃんでもベンツに乗っている！！」

(2011. 12. 9)

マンチェスターでの英国微生物学会

イギリスのマンチェスターで英国微生物学会の年大会が開催された時には、一つのシンポジウムの講演者として招待されました。宿舎で出される食事は、「イギリスの食事は不味い」という風評通りでした。バターを塗ったトーストや目玉焼き・フライドポテトなどカロリーだけは高いのですが、工夫がたりません。フランスの研究者たちに「美

美味しい物を食べに行こう」と誘われてインド料理の専門店にいきました。このインド料理は素晴らしい御馳走でした。さすがに美食の國・フランスの人たちは舌が肥えていますね。

学会開幕のセレモニーでは、舞台の上に男性たちが大きな金の首飾りをかけて偉そうに並び、アン王女の挨拶がありました。イギリス王室の伝統でしょうが、このような大時代的なセレモニーと科学者の世界との間に違和感がありました。

(2011. 12. 10)

ストラスブールでの記念式典

パリにはそれまでに何回か行ったことがありましたが、フランスのストラスブールは初めてでした。日本政府が始めた「ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム」の十周年記念式典に出席するためでした。このプロジェクトは、日本人の研究者を含んだ数人の世界の研究者がグループを組み、研究計画書を作成して審査に通ると数年間の研究費が支給される制度です。私もフランス人2名とアメリカ人1名とでグループを作り、申請書が受理されて、その研究が進行中でした。

階段状の講義室で研究者がそれぞれ研究発表したあとで、大会場で式典がありました。舞台には数個の椅子が並べられて、中曽根康弘元首相を中心に外国の御偉方が並びました。彼が首相のときにこのプロジェクトは発足したのです。そして、次々に祝辞が行われたのですが、非常に印象的だったのは、舞台上の外国人は足を組み直したりして始終身体を動かしているのに、中曽根元首相はどしりと腰掛けたまま身動きをしないことでした。彼は座禅をしていたとのことですので、座禅の心境でいたのでしょうか。それは観客に日本人の強い精神力を印象付けたに違いありません。ちょっと、不気味さを感じたかも知れませんが他の人とは異質の存在でした。

中曽根元首相の日本語の講演は、遺伝子研究が原子力の次の大きなテーマになるというような話だったと思いますが、あまり良く覚えておりません。この大会場は国際会議用に造られていたので、周りにはガラス張りの同時通訳室がたくさんあり、各国の言葉に翻訳されていました。私はときどきレシーバーで英語通訳も聞いていましたが、同時通訳には相当苦勞しているようでした。中曽根元首相はフランスに来る飛行機の中で遺伝子の本を読み講演の構想を練ったとのことで、原稿無しの講演だったのです。

(2011. 12. 11)

国際研究集会と蝶採集

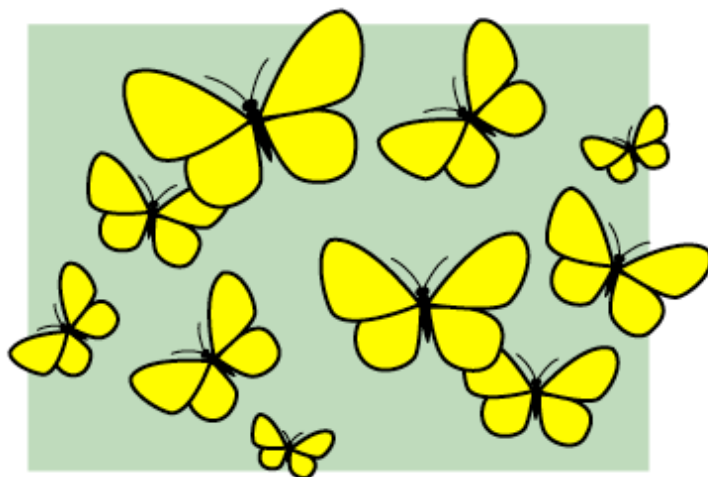
ボストンから北へ貸し切りバスで2時間の所にあるニューハンプシャー州の短期大学での国際研究集会は、学生の夏期休暇を利用して開催されました。研究集会は朝8時半から夜10時までびっしりスケジュールが組まれており、その上、明け方近くまで皆はアルコールを飲んで盛り上がっているのです。それが1週間続くのです。アメリカの人たちのタフさには負けてしまいます。私は、時差の影響でグッタリしていました。

日本から来ていたS大学のI教授^{アイ}と半日の自由時間を使って蝶^{ちょう}の採集に行ってきました。I教授はボストンからレンタカーで来ており、私の分もと昆虫網を二本持ってきてくれていました。その日は少し涼しくてあまり昆虫は飛んでいなかったのですが、それでも二人で十数種の蝶を採集することができました。全部日本の蝶とは異なる種で、楽しいリラックスタイムでした。

こんなI教授との昆虫採集は、カリフォルニア州のタホー湖で国際研究集会が開催されたときにも行いました。息抜きにはぴったりでした。

二人とも専門は大腸菌を使った分子生物学ですが、少年時代からのアマチュア蝶研究者でもあるのです。もっとも、I教授は大学において蝶のDNA研究を大腸菌の研究と併行して始めたので、今ではプロであり、「蝶のアマチュア」とは言えません。私は定年退官後に自宅でやった蝶の研究成果を英論文にして外国の昆虫生理学の専門誌に発表しましたが、それで給料を貰っている訳ではありませんから、「プロフェッショナル」の定義に従えば、まだまだ「蝶のアマチュア」なのでしょう。

(2011. 12. 12)



チョウの乱舞

モノ湖

アメリカ留学中には、家族でしばしば気ままな自動車旅行をやりました。旅行中の失敗談は沢山ありますが、一番ピンチだったことを話します。

留学した最初の年にヨセミテ国立公園にドライブしたときには、妻と2歳の娘と数ヶ月の息子との4人でした。途中のサクラメント市付近の平原はものすごい暑さでダウン寸前でしたが、ガソリンスタンドの売店で飲む冷たい水でようやく生き返った感じでした。しかし、シェラネバダ山脈を上り出すと気温はどんどん低下してきて、ヨセミテでは快適な気温になりました。ハーフドームの向かい側の山の岩の上ではレンジャーによる説明会がありました。ヨセミテは氷河が長い年月をかけて岩盤を削って出来た地形だそうです。

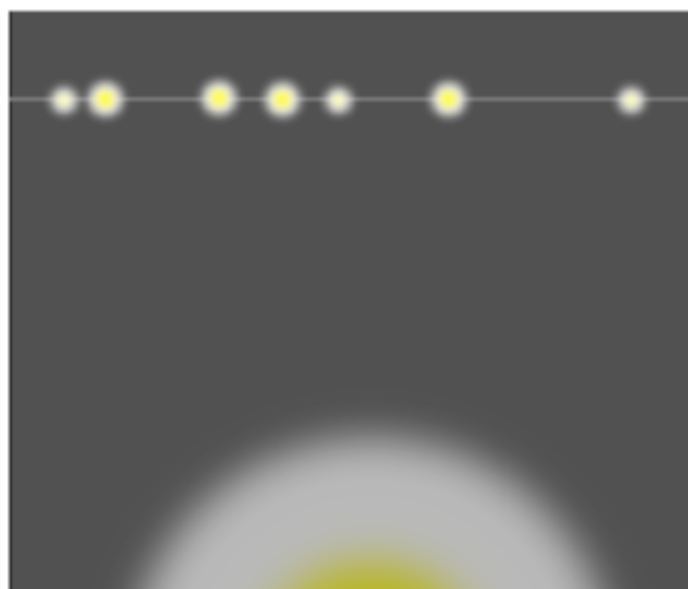
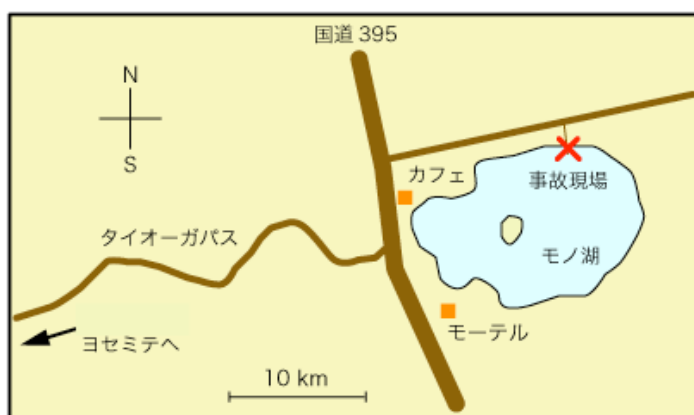
ハーフドームの北側の山脈の上を通るタイオーガパスを走って、ヨセミテ公園の裏側（東側）のモノ湖（Mono Lake）の西側に着きました。宿泊するモテールを決めたあと、夕暮れのモノ湖を見にドライブに出かけました。塩濃度が高い湖です。モノ湖の西側を南北に走る国道395号線から、モノ湖の北側を西から東に伸びる細い道を通って荒野を東に進み、更に右折れした荒地の中の小道を進み湖畔に着きました。ところが、あまりに湖に近づき過ぎたために、ズブズブと湿地帯に車が沈みこんでしまいました。水が車内に入るすれすれのところまで沈んでしまい、車をバックして抜け出すことができなくなりました。

たまたま近くに若い女性の3人組が湖を見にきていたので、彼女らの車で引っ張ってくれとお願いしたが、引っ張るロープを持っていないとのことでした。私は自動車事故の保険会社AAA（トリプルA）に加盟していたので、そこに助けに来てもらうよう電話してくれと頼みました。AAAは日本のJAFのような会社です。彼女たちはOKといい、私たちをおいて車で行ってしまいました。

日が沈み、あたりは真っ暗になりました。だんだん気温も下がってきましたが、なかなかAAAは助けに来てくれません。心細さがつのります。果たして彼女たちは本当にAAAに電話してくれたのか。ついに我慢できなくなり、私はどこか電話する所を探しに行くことにしました。懐中電灯を持ち一人で真っ暗な荒野に行くことは勇気がいりました。15km位歩いてやっと国道395号線に

出ると、長距離トラックが走っていました。そして一軒のカフェのような店を見つけ、店主に事情を話すと AAA に電話してくれました。そして、「AAA がもう牽引車で事故現場に向かっているから、お前はここでコーヒーでも飲んで待っている」というのです。しばらくすると、AAA の牽引車に引かれて私の車がやってきました。中には家族が乗っていました。子供と共に真っ暗な湖畔に残された家内は、どんなに心細かったことでしょうか。

あの女の人たちは約束通り AAA に SOS 電話をしてくれていたのです。荒野には何も目印になるものはありませんので、私では電話で事故現場の位置を AAA に正確に伝えられなかったと思います。携帯電話などない時代のことでした。(未送信)



国道 395 号線を走るトラックの列

アメリカの交通規則

アメリカの車の交通規則は、州ごとに少しずつ異なります。たとえば、交差点で赤信号のときでも小回りの右折（アメリカでは右側通行）をして良い州と禁止されている州があります。また、私がアメリカに留学していた1970年代の初頭（石油ショック前）では、カリフォルニア州のハイウェイの最高スピードは90マイル（145 km）でしたが、ネヴァダ州ではハイウェイの最高速度制限は無く、「reasonable な（適正な）速度で走れ」としか書いてありませんでした。

それで、留学していた当時、家族を乗せてネヴァダの砂漠をぶっ飛ばしていたところ、或る町に近づいたときに、後からサイレンを鳴らしながら赤と青のランプを派手に点滅したパトカーが追いかけてきました。「しまった、捕まった」と思ったのですが、捕まったのは前を走っていた車でした。ネヴァダでも町に近づくと速度制限の表示が出ており、それには従わないと捕まってしまうのです。

その反対に、「走り方が遅過ぎる」とパトロールのオートバイの警官に注意されたこともありました。サンフランシスコ半島の湾にかかる片側1車線の長い橋を渡り終わったときに、警官に止められたのです。「遅すぎて後に長い渋滞ができた」ということです。しかし、警官が車の中を覗くと乳児と幼児が乗っていたので、無事放免されました。

アメリカで車に乗る時には、日本の運転免許証の他に国際運転免許証を持って行かればなりません。ただし、カリフォルニア州の住民になると、カリフォルニア州の運転試験を受け、新たにカリフォルニアの運転許可証を得なければなりません。カリフォルニアに移住したい人が多いので、他の州からの移住を抑制するための規則だとのことでした。ペーパー試験と道路での実技試験がありましたが、ペーパー試験は100点に近かったし、実技も簡単でした。

アメリカに留学する直前に日本で運転免許を取得したのですが、日本の道路では実際に運転したことはなく、初めてカリフォルニアのハイウェイを走って感激していたのです。サンフランシスコの南100 km程にあるスタンフォード大学に留学していたのですが、夜遅く研究が終わり大学から帰ってくると、車に家内と眠っている子供たちを乗せて、片側4車線のハイウェイをサンフランシスコ近くまで、用もないのに往復2時間程毎晩走っていたのでした。

アメリカでレンタカーを借りると、アクセルを踏まなくても一定速度で走ることので

きる車に当たることがあります。一定速度にしたいときにボタンを押すと自動的にそのスピードを保つことができるのです。アクセルから右足を離しても一定速度で走り続け、右足を休ませることができるので、高速道路での長時間の運転にはこれは便利です。ブレーキをちょっと踏むとこの機能は解除されます。

しかし、休ませていた右足をブレーキペダルの上まで持ってくるまでに時間がかかるので、カーブしている道などでとっさにスピードを落としたいときには、このタイムラグは怖い感じですが、ブレーキを踏んだときに、アクセルを吹かしながら同時にブレーキをかけたようになり、減速が遅れる感じがし、これも怖い感じですが、この定速度装置を働かせていないときには、アクセルから右足を離した瞬間にエンジンブレーキがかかりだし、そこにブレーキをかけるので、減速反応が早く、この点では安全のようです。日本のような狭い国では、このような定速度装置は、乗用車には特に必要ないように思います。

(2011. 12. 13)

サンディエゴとジョシュアツリー国立公園

ニューハンプシャーでの研究集会が終わった後で、ボストン空港からサンディエゴ空港まで飛行機で飛び、その週末にレンタカーでジョシュアツリー国立公園を1泊2日でドライブして来ました。背の高いサボテンのような植物の生えた半砂漠の乾燥地帯（デザート）でした。太陽がガンガン照りつける中を1日走っても2〜3台の車とすれ違うだけでした。見渡す限りの景色の中で、自分一人しか居ない状況は、日本では経験できないことです。

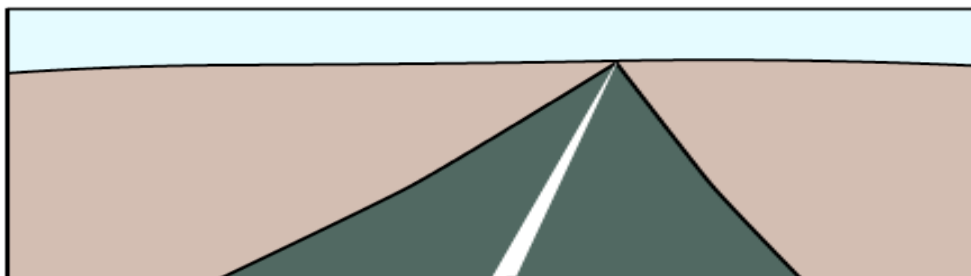
レンタカーを借りたときにもらった注意書きには「舗装^{ほそう}していない道を走らないこと」とありました。それで、道端に車を停めて、歩いてデザートの中を生物の観察をしながら探索しました。所々に生えている木の下には、砂の上にガラガラヘビがとぐろを巻いた渦巻き状の跡がたくさんありました。「アメリカのデザートでは木陰で休んではならない」という注意書きを以前読んだことがありますが、ガラガラヘビの危険があるからです。

日本語で「砂漠」というと「月の砂漠をーはるばるとー・・・」の歌のような砂丘だけの地形を想像しますが、英語のデザート（desert）という言葉は、いろいろなレベルの乾燥地帯を含んだ広い言葉です。砂だけの砂漠は「sand/sands」といいます。以前「砂漠は生きている」というディズニーが作った美しいアメリカ映画がありました。以前「砂漠は生きている」というディズニーが作った美しいアメリカ映画がありましたが、原題は「The Living Desert」（1953）で、デザート^{デザート}の生物たちの記録映画でした。

ジョシュアツリー国立公園から帰ってきて、月曜日にはカリフォルニア州立大学サンディエゴ分校の女性の教授の研究室でセミナーをやりました。その晩はこの教授の誕生日パーティーだということで自宅に招待されました。夫君も大学の教授とのことでした。その邸宅は海の見える丘の上にある白い瀟洒^{しょうしゃ}な建物で、裏庭には25メートルの温水プールがありました。これはアメリカの大学教授の平均的な住居だとのことでしたが、日本の私の家や知人の大学教授の家と比べると雲泥^{うんでい}の差があります。

外国でのパーティーは、いろいろな人たちに取り巻かれて気疲れでリラックスできず苦手です。「プールで泳いだら」と勧められましたが、大勢の客の前で貧相な身体で下手な泳ぎをする勇氣はありませんでした。代わりに翌日、サンディエゴの海岸に一人で遊び、リフレッシュしてから日本に帰ってきました。日本ではハードながらもワクワクする研究生活がまた始まります。

(2011. 12. 14)



デザートのドライブ

美術館と博物館

スペインのマドリッドで国際研究集会が開かれたときは、初めてのスペイン旅行でした。集会が終わった時に、主催者の教授にこれからどうする予定かと訊かれたので、「プラド美術館でベラスケス教授とゴヤ教授に会う約束をしています」と答えて絵を観に行ってきました。

同じ調子で言うと、オランダのアムステルダム国立美術館ではレンブラント教授、ゴッホ美術館ではゴッホ博士に会いに行ったということになります。イギリスのマンチェスターでは、ロンドンの大英博物館を観にいきました。スウェーデンのストックホルムではリンネ博物館を見学しました。カール・フォン・リンネは200年程前に生物の学名を二名法（属名と種名）で記載する方法を提唱し、植物の分類に業績を残しました。この博物館には彼の描いた植物の精密な絵画や標本が多数展示されていました。当

時未だダーウィンの進化論は無かったので、リンネ自身は神が作った生物の分類をしていると思いこんでいたのです。それは人類を頂点としたピラミットのような分類学でした。現代の分類学では、生物進化の枝分かれを反映した分類を目指して行われています。そのために、DNAの塩基配列が解析され、その客観的なデータを基に生物進化の系統図が作成されています。

フランスのトゥールーズのときには、貸し切りバスで皆と一緒にラスコー^{ラスコー}洞窟などの観光地を巡りました。ラスコー洞窟は、スペインのアルタミラ洞窟と同様に、新石器時代人が描いた動物の壁画で有名です。ただし、観光で見学したのは、遺跡の近くに作ったイミテーションの洞窟でしたが、本物とそっくりな精巧な作りでした。パリには何回も行ったのでほとんどの美術館を観ることができましたが、デンマーク・オーストリア・スイスの時には残念ながら美術館や博物館には行けませんでした。アメリカには何回も行きましたが、いつも会場の近くの美術館や博物館を見学して帰ってきました。

カナダのバンフでの研究集会の時には、バンクーバーでレンタカーを借りて家内と二人で旅行をしながらバンフに行きました。カナディアンロッキー国立公園をドライブして、氷河の末端を歩いてきました。また、バッドランド（悪い土地）と呼ばれている何もない荒涼たる地域にも行ってきました。この土地の地下には恐竜の化石が眠っており、ここから発掘された恐竜化石をたくさん展示しているロイヤルティレル博物館を見学したかったのです。

カナディアンロッキーの近くの林の中を蛇行して流れている川はいかにもキングサーモンが遡上してくるような川でしたので、川辺に一軒ぽつんと建っていた小さな食堂に入り、メニューに書いてあった「Salmon」を注文しました。食堂の主人がこの川で釣ったキングサーモンが出てくるものと想像して楽しみに待っていたのですが、出てきた料理は、なんと缶詰のサケの切り身を皿の上にそのままひっくり返したただけのもので、啞然としてしまいました。

フランスのニースの近くの街で集会が行われた時には、電車を使ってアンティープのピカソ美術館に行ってきました。フランス語が出来ないので、電車の切符の自動販売機の文字が読めなくてもたもたしてしまい、大学生のような若者がきて助けてくれるまで待ちました。切符一つ買うにもこんな有様ですから、言葉が通じない国の一人旅は疲れてしまいます。この美術館は、ピカソが海辺のお城を買い取り、アトリエとして暮らし

ていた邸宅で、ピカソの写真集で前から馴染みのあるところでした。この邸宅でのピカソの自由奔放な生活に、少年時代から憧れていたのです。

(2011. 12. 15)

国際研究集会とリクレーション

ヨーロッパの国で研究集会が行われた時には、主催者側が貸し切りバスなどで行うツアーやオペラ観劇などを用意してくれることが多かったのです。私が主催した大阪の万博公園前のホテルでの国際研究集会のときにも、貸し切りバスで金閣寺などを回り、懐石料理のおもてなしをするツアーを企画しました。しかし、アメリカでの研究集会のときには、そういうことは一切なしで、「それぞれ自分で勝手に観光を……」というのが主催者側の方針のようでした。こんなことにも、お国柄がでるのですね。

この大阪での研究集会の数日前にアメリカで9.11同時多発テロがあり、予定していたアメリカ東海岸の研究者たちが来日できなくなり、急遽プログラムを編成し直し、大変だったことを覚えています。

(2011. 12. 16)

アトランタの米国微生物学会

アメリカのアトランタで開催された米国微生物学会の年大会では、一つのシンポジウムの講演者として招待されました。これは巨大な学会の年大会でしたので、広大な会場でした。この年大会では、私が若いときに留学したスタンフォード大学のチャールス・ヤノフスキー教授が生涯の研究に与えられる大賞を受賞いたしました。一方、私は米国微生物学アカデミーの名誉会員に推挙されました。そして、この名誉会員だけのワインパーティーで、数十年ぶりにヤノフスキー教授に再会することができました。

シンポジウムの終わったときに、講演者たちの記念撮影がありました。皆の中央でエンジ色のアカデミー名誉会員のリボンを胸に付けて写っている一番小さな男が私でした。’ Great works by a small body’ なのかな。

(2011. 12. 17)

砂漠乾燥地帯のドライブ

国際研究集会の終わったあとでボストンからソルトレークシティへ飛行機で飛び、空

港でレンタカーを借りてユタ州とアリゾナ州の国立公園巡りを一週間やり、一人旅を満喫しました。

砂漠乾燥地帯（デザート）の広大な景観は日本にはありませんので、何処を走っても楽しいドライブでした。ホテルの予約などは全くしないで、行き当たりばったりの自由行動は開放感があるものでした。暑熱の砂漠の中を、走っても、走っても、家は無く、夕方近くになり宿泊はどうしようかと少し心配になりかけたときに、ぽつんとモーテルが一軒、砂漠の中に現れたりするのです。

そのモーテルの食堂は窓にガラスのない掘っ建て小屋でしたから、暑い外気が流れこみ砂漠と一続きでした。軒下のチューブから霧が吹き出して気温を幾分下げてはいましたが、乾き切った喉にビールを流し込むと一気に酔いが回り、固いパンのサンドイッチが出てきたころには既にダウン寸前、部屋のベッドにひっくり返って眠ってしまいました。そして、翌日はそのパン1個をかじりながら、またまた砂漠を疾走したのでした。

最近、インターネットの Google Earth を使ったバーチャルな映像の中で、以前ドライブしたことのある砂漠の中の道を走っていると、あの思い出のモーテルが突如現れたのには感動しました。高級なホテルに泊まったことなどよりも、こういうワイルドな体験の方が強く脳裏に焼き付いています。

(2011. 12. 18)

サンタ・フェでの最後の国際研究集会

アメリカ・ニューメキシコ州のサンタ・フェには、それまでに国際研究集会で数回行ったことがありましたが、最後に行ったときには娘と二人でした。胃癌の手術で退院してから2ヶ月後のことでしたので、身体がまだ弱ったままで、柔らかな物を少ししか食べられず、外食はままならぬ状態でした。40日間の入院中の点滴で17kgもやせ細った身体が心配だったので、付き添いに一緒に来てもらったのです。

このときの集会では、私が会の最初に1時間の基調講演をすることが1年前から決まっていたので、欠席するわけにはいかなかったのです。私の定年退職を契機に、アメリカの主催者たちが私のために、研究者としてのこの「引退の花道」を計画してくれていたのです。この基調講演の大役は無事終えることができました。

半日の自由時間には、アメリカインディアンの住居跡で有名なバンデリア国定公園を見学し、日本の他大学の若い研究者たちを誘ってレンタカーでいきました。深い溪谷の断崖に多数の洞窟住居跡がありました。溪谷ではトモロコシ等を栽培しており、断崖の

上の荒野ではバイソンなどを狩っていたとのこと。物珍しい種々の鳥類がたくさん観察されることも興味あることでした。帰路の途中、ロスアラモスを通りましたが、原爆作製の経緯を展示している小さな博物館には閉館時間を過ぎていたので入れませんでした。ここは以前家内と二人で見学をしたことがありました。荒野の中に作ったこの新しい町で原爆作製は秘密裏^りに行われたのです。

集会のあとで、サンタ・フェからレンタカーでアルバカーキに戻るハイウェイで雪が降りだしました。真っ白な石膏^{せっこう}の結晶でできた巨大砂丘のホワイトサンズ国立公園を観に行く計画でしたが、前方には黒雲が立ちこめて吹雪になっているようですので、雪で覆われた白い景色のホワイトサンズを見てもしょうがないので行くのは止めました。

翌日は快晴で、アルバカーキ空港からサンフランシスコ空港に飛行機で飛びました。飛行機は途中、留学中に家族して車で行ったことのあるヨセミテ国立公園の真上を通して、懐かしいハーフドームが見えました。そして、車の事故を起こしたあのモノ湖も見えました。飛行機がサンノゼ市上空からサンフランシスコ湾にさしかかると、思い出の景色が見えてきました。サンフランシスコ空港に着陸するときには、以前パトロールの警官に「遅過ぎる」と注意されたことのあるあの長い橋（サン・マテオ橋）の上を至近距離で飛びました。

サンフランシスコ空港でレンタカーを借りて、若い時に留学していたスタンフォード大学の研究室を訪問してきました。広大な敷地^{さまか}にある大学の建物はほとんど昔のままでした。しかし、大学の門前町であるパロアルトは様変わりして、たくさんのレストランや喫茶店が夜遅くまで営業しており、人々で賑わっておりました。シリコンバレーの中心地ですから、リッチな若い人たちが住みつき地価や物価が高騰しているとのことでした。

そして、家族で暮らしていたパロアルトの家とメンロパークの家の前で記念撮影をしました。留学して最初に借りたパロアルトの家から4ヶ月後にメンロパークの家に引っ越したのです。メンロパークの芝生に囲まれた白い小さな木造の一階建ての家は昔のままでした。娘は当時、2〜4才でしたから記憶には残っていないようでしたが、私たちの話にしばしば出てきた家を見て感激しておりました。この家の裏庭には子供の遊びのための小さな小屋があり、娘は保育所で友達になった近所の女の子とこの小屋でママゴトをして遊んでいました。娘は当時英語で会話ができたのです。パロアルトの木造二階建ての家の方は、当時一階を私たち家族が借り、二階は数人の独身の人が借りていましたが、この家はオフィスのように改装されていました。サンフランシスコ市内にも行

き、あちこち観光に走り回ったあと、フィッシャーマンズワーフ（漁夫の波止場）のレストランで新鮮なカニ、エビ、ロブスターなどを堪能しました。

翌日は、種々の花が咲き乱れる美しいカリフォルニアの海岸線に沿った国道1号線をレンタカーで南下しました。海岸断層の下には白い砂浜が延々と続いており、夏になれば素晴らしい海水浴ができるはずですが、このドライブではモンテレー半島のパシフィック・グローブ市に蝶の集まる木立を見にいったのです。この街に来たのは4回目でした。この街には北米の各地から冬越しのためにオレンジ色に黒い筋の模様のある大きなモナーク蝶（オオカバマダラ）がたくさん集まってきて、大木の枝に鈴なりにとまっているのです。そして春になると、世代を繰り返しながら、北米全体に分布を広げて行き、何世代か後の子孫がまた越冬のためにここにやって来るのです。遺伝的に刷り込まれている行動ですが、不思議な現象です。

帰路の途中で夜になってしまったのでハイウェイ 101号線を降りて、見知らぬ街の中を、モーテルを探しながらうろろと走り回っているうちに方向感覚を失ってしまいました。車の走っていない、何も無い暗い街でした。

突然パトカーが横付けして、止まれと合図してきました。

「ふらふらと運転していてパトカーに接触しそうになった」ということです。

「だけど接触はしなかったでしょう」

娘がとぼけてわざとたどたどしい英語で答えました。こういうときには英語があまり分からないフリをする方がいいと「地球の歩き方」に書いてあったそうです。

パトカーは無灯火でそっと後から付いてきて様子を窺っていたようです。バックミラーにはヘッドライトが何も映っていなかったため、私の車一台しか走っていないと思っていたのです。

警官が「これはだれだ」と娘に聞くと、

「This is my father」

誘拐ではありません。

「運転免許証をみせろ！」

「降りて後のボンネットを開けろ！」

レンタカーのボンネットには何も入っていませんでした。

「どこかにモーテルはありませんか？」

と反対に訊ね、途中までパトカーに先導してもらって、無事に放免されました。

(2011. 12. 19)

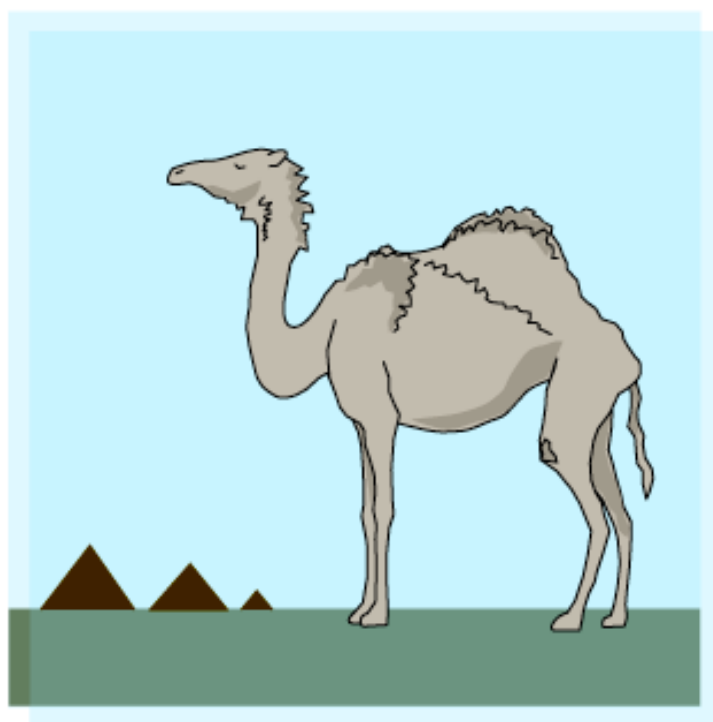
グループ観光旅行

私は頻繁に海外の研究集会や学会に参加していましたが、主催者側が旅費を出してくれる招待講演の場合が多く、そうでないときには文部科学省から旅費を頂いたので、現役時代には自腹を切って海外旅行をしたことはありませんでした。そして研究集会の終わった後で、慌ただしくちょっと観光をしていたのです。

3年前に京都大学を退職してから、やっと仕事なしのゆったりした観光旅行を家内と二人で出来るようになりました。グループ旅行では添乗員に面倒なことは全部まかせて呑気に旅行できるし、言葉が不自由な国でも気楽に行ける良さがあります。

元気なうちに、比較的ハードな所から見ておこうと思い、これまでにインド、エジプト、ブラジル、アルゼンチン、ペルー、ベトナム、カンボジア、ネパール、トルコなどに行ってきました。しかし、近場の中国や韓国などには行ったことがないのです。それに、まだ沖縄にも行ったことはないのです。楽しめる所がまだまだ残っていますから、もうちょっと頑張っておきたいと思っています。

(2011. 12. 20)



エジプト

「変なアメリカ人」シリーズ



アメリカ人と地球温暖化

アメリカのスタンフォード大学に留学したときに借りたアパートや一軒家では年中ボイラー室でガスが燃えており、温水供給や室内暖房が働いておりました。ボイラー室では、種火のバーナーの炎が20センチもありました。これが一年中燃えているのです。夏の間には暖房は必要ないので、オーナーに種火を消しておこうかと訊ねましたら、その必要は無いとのことでした。アメリカの都市の多くの家で、一年中こんな風に種火のバーナーを盛大に燃やしているのならば、それだけでもアメリカは大変な熱量を放出していることとなります。瞬間湯沸かし器のように、スイッチをいれたときだけに電気でガス点火する装置など簡単にできるはずなのにこんなこともしないで、現在でもじゃんじゃんとして炎を燃やして地球温暖化に貢献しているようです。こんなアメリカ人を見ると、日本人がやっている京都議定書による涙ぐましいエコなど、あほらしくてやっていられません。もし近年の急激な地球温暖化が本当に人間の炭酸ガス排出活動によるものならば（疑問は依然として残りますが）、その対策は全地球規模で考えなければならぬグローバルな問題なのに、最大な炭酸ガス排出国のアメリカはそれには消極的なのです。

アメリカ人は、ガソリンにはまだ「ガロン」を使っているし、距離は「マイル」、長さは「インチ」、温度は「華氏」です。科学の世界ではこういう単位は使わずに、万国共通のメートル法を使っています。日本では以前苦労して尺貫法を廃止してメートル法に統一したのに、アメリカではまだメートル法に統一していないのです。アメリカ人は自分に都合の良い「グローバル化」は他の国に押し付けますが、自国内のこんなことは無頓着むとんちやくのようです。

(2011. 12. 27)

アメリカ人と進化論

アメリカでは、成人の90パーセントがキリスト教徒ですが、聖書に書いてあるとおりに神が人間や他の生物を作ったということ信じ生物の進化論を信じない人が40〜48パーセントもおり、進化論を教えていない州立高等学校は80パーセントだそうです。アメリカは一見科学の先進国のように思えるのですが、こんな一面もあるのです。

以前、アメリカの権威ある学術機関が進化論に対する意識調査を行った結果、一流の生物学者（アカデミー会員）の殆ど全員が進化論を支持していますが、医者ではその比率がだいぶ低くなるとのことでした。また物理学者などにも進化論を否定する人がいるそうです。

化石による古生物の研究結果や分子生物学による「全ての生物のDNA上の遺伝暗号は基本的に同じである」という発見は、生物が一つの共通祖先から枝分かれして進化してきたという強力な証拠であるのに、聖書を信じる人たちは、「遺伝暗号は神が作ったものであり、神がその遺伝暗号表に基づき個々の生物を作ったのだ」というのです。2000年も前の聖書を信じる人たちは、聖書を離れてものごとを思考することができなくなっているのです。

国立遺伝学研究所の木村資生博士^{もとお}が1968年に発表した「中立進化説」を巡り、生物学者の間で生物進化のメカニズムについて論争がありました。「中立進化説」というのは、DNA上の生物機能に関係しないような中立的な塩基配列の変異（自然選択圧がかからない塩基配列の変異）でも種の集団中に自然と広がって行く進化のメカニズムについての説です。すなわちダーウィンの説の「自然選択」が働かない場合でも進化できるメカニズムを示したセンセーショナルな説でしたが、ダーウィンの進化論を否定するものでは当然なかったのです。この論争はその後、誤解も溶け、多くの専門学者から自然選択説と並立できる概念であることが認められ、統一されて解決しました。しかし当時、この論争を外から見ていた門外漢たちがこの中立進化説をダーウィン否定と受け取り、「ダーウィンの進化論はまだ証明されていない」などと、トンチンカンなことを言っていました。これらの人たちは、「神様が人間や生物を作った」というストーリーが好きでたまらないのでしょう。生物進化におけるダーウィンの「自然選択説」も木村資生の「中立進化説」も「神の力」などには頼らない唯物論的な考え方です。

数年まえに、ローマ法王がアメリカを訪問した際、法王がハーバード大学で講演する

ことに大学の科学者たちが異を唱え中止させたことがありました。「ヴァチカンがガリレオの時代から現在まで科学の発展を妨害してきたのだから、ローマ法王はハーバード大学で講演する資格はない」という反対運動でした。150年程前にダーウィンが進化論を提唱して以来、ヴァチカンはこの説を猛烈に非難してきましたが、最近では単純な生物から複雑な生物ができた生物進化については容認しているそうです。しかし、無生物から生物が出現する過程「生命の起源」には依然として「神の力」を信じているのだそうです。

一方、オパーリンの「生命の起源」(1922)は原始地球で無機物から有機物が作られ、有機物の反応によって生命が誕生したという化学進化説であり、これも「神の力」などに頼らない唯物論的な説です。

アメリカの反進化論団体が1990年代に言い出した説だと、宇宙の始まりのビッグバンが起る前に「インテリジェント・デザイン(知的設計)」があったのだそうです。知性ある何かによって生命や宇宙の精妙なシステムが設計されたのだという説です。これらの人たちは生物の進化を一部認めつつも「この過程には偉大なる知性の操作が働いていた」と言うのです。「神」という言葉を使わずに、結局は神のような「知性の操作」を信じたいのでしょう。「知性ある何者か」などという言葉は、「神」と同義語です。ジョージ・ブッシュ前大統領も「インテリジェント・デザイン」を公立学校の教育の場で教えることを支持しているとのことで、アメリカ人の反進化論は根深いのです。

しかし、イギリスの生物学者リチャード・ドーキンス(「利己的遺伝子」の提唱で有名)は、「インテリジェント・デザイン説はニセ科学であり、宗教でないふりをしながら公立学校の教育の場に食い込もうとしている」と鋭く批判しています。私も同感です。

一方、ヴァチカンはカトリックの信じる「神」が、このアメリカの反進化論者の主張する「インテリジェント・デザイン」で置き換えられてしまうことを警戒しているそうです。

いずれにしろ、アメリカの80パーセントの州立高校で生物の授業の際、進化論を教えていないのはこのような思想が根強くあるからでしょう。このような思想が生物進化の正しい理解を妨げているのです。アメリカ人の無知蒙昧^{むちもうまい}ぶりがこんな所にも垣間みられることは辛いことです。

(2011. 12. 29)

アメリカ人と自動車ショー

アメリカ東部での研究集会のあとで西海岸のシアトルまで来ましたが日本への飛行機の乗り継ぎのために一日空いたので、レンタカーを借りてシアトル観光をしました。郊外の体育館のような大きなドーム状の建物の駐車場につぎつぎに沢山の車が入って行くのを見て、何事かと野次馬根性を発揮して私もついて行きました。何か自動車関係の催し物があるようでしたが、その内容を知らぬまま私も入場券を買って建物の中に入りました。

ドームの中はスタジアムになっていました。客席はすでに満席で、熱気でムンムンしており、グラウンドの中央には土を盛り上げた小山が作ってありました。ファンファーレが鳴り響くと乗用車が何台も晴れやかに登場して来ました。まるで体育祭の選手宣誓式^{せんせいしき}のようです。司会のアナウンサーはプロレス試合の時のような派手派手なオーバーアクションの声を張り上げています。そして、それらの車が大きなセメントのブロックを乗せたソリを引っ張って再登場すると、観客は大喜びです。スタート台のピストルの音を合図に、猛烈なエンジン音をさせながら走りだしました。小山を登りだすとどの車も苦戦をしています。いくらアクセルを噴かしても、前輪が持ち上がってしまいどうしようもない車もあります。正に**ばんば**馬競争を自動車でやっているのです。スタジアムの中はエンジンの廃棄ガスの匂いで充満していました。

次には、乗用車が何台も並べられ、スポーツカーがその上をジャンプして飛び越える競技が始まり、つぎつぎに派手な色彩の車が飛び越えて行きました。そのうちに、乗用車のボデーに不釣り合いの巨大なタイヤを付けた腰高な車が登場して、並んだ車の上をミシミシと踏みつぶして行くのでした。観客たちは絶叫しながら応援しているのです。なんと単純で陽気なアメリカの人たちなのでしょう。しかし、いつの間にかアメリカ人と一緒になって応援している自分に気が付いたのでした。

(2011. 12. 30)

アメリカ人と日本文化

私がアメリカのスタンフォード大学に留学したのは1970年の2月のことでした。その時は大阪万博直前でしたから、大阪は突貫工事であちこち掘りくり返らされており大変でした。

スタンフォード大学では教授室の隣の研究室が与えられ、同室はポスドクのP君でしたが、初めはなかなかアメリカ訛りの英会話が聞き取れなくて苦労しました。P君が「Go はできるか？」と質問してきましたが、とっさに何のことだか分からないでぼかんとしていました。「Go !」「Go !」と言われても分かりません。やっと「Go !」とは囲碁のことだと気が付きましたが、囲碁は全く知りません。彼は囲碁をやり、日本人と勝負することを楽しみにしていたのだそうです。

P君が変な発音で、「Show-Gi (将棋) は出来るか?」「Color-Tea (空手) は?」「Jyu-Do (柔道) は?」「Su-Mo (相撲) は?」「Ken-Do (剣道) は?」「Show-Do (書道) は?」「Sir-Do (茶道) は?」「Eke-Burner (生け花) は?」「No (能) は?」「Cab-Key (歌舞伎) は?」「High-Ku (俳句) は?」とつぎつぎに日本文化について訊ねてきました。しかし、どれもできません。

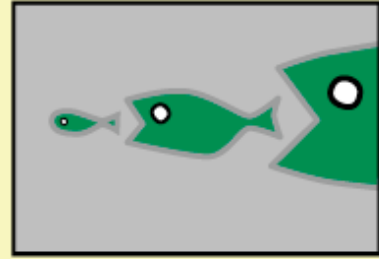
P君が「こいつは本当に Japanese なのか?」という顔をしていましたので、「Zen ならできる」と靴を脱ぎ、椅子の上で両足の足裏を上向きにした胡座(あぐら)を組み座禅の恰好をして見せました。

「Zen」の恰好しか出来ない「変な日本人」でした。

(2011. 12. 31)



「魚釣り」シリーズ



魚釣り事始め

子供のころから魚釣りは好きでしたが、あまり上手ではありませんでした。子供のときに釣った一番の大物は20センチほどのウグイでした。六日町と小栗山こぐりやまの間を流れる小川で、餌はミミズでした。

また或るとき、大雨のあと池から逃げ出した大きなコイが魚野川にいるという情報を聞き、むしように釣りたくなりました。もし大きなコイを釣り上げれば、友達の間ではまだ誰もやったことのない勲章ものの快挙になるはずでした。イクラをアルコールに浸けて固くして、それを餌にしました。坂戸山はぐろはなの羽黒鼻はぐろはなのところで魚野川が大きく蛇行しており、その深い淵ふちで一日ネバって見たのですが釣れませんでした。コイ釣りは子供にはやはり無理なのでした。

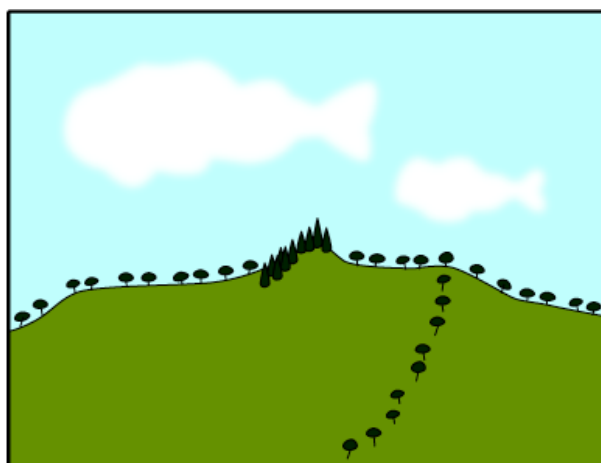
アメリカ留学中にドライブしたヨセミテ国立公園の近くの川には、産卵を終えたサケの死体があちこちに沈んでいました。それを見て急に釣りがしたくなり、近くのスーパーマーケットに駆け込み、リール、二本つな繋ぎのロッド、ルアーを買ってさっそくルアーフィッシングにトライしてみました。初めてのルアーフィッシングでしたから、投げ方が分からず木の枝に糸を引っ掛けてしまうようなことを繰り返しました。このときにはナマズ1匹さえ釣れませんでした。疑似餌ぎじえで魚を釣ってみようという趣旨には共感しました。

下手なルアーフィッシングを諦めてヨセミテ公園に来てみると、溪流の中に半身入り、フライフィッシングをしている人たちがいました。このとき、初めてフライフィッシングを見たのですが、優雅な洗練された釣りでした。時々監視員が見回って、遊漁料を収集しているようでした。私たち家族はこの光景を見ながら、河原でピクニックをして遊んでいたのですが、釣りは見ているだけでも面白いものです。

アメリカ留学から帰ってきてからは、小学生の息子と一緒にブラックバス釣りに熱中しました。ルアーフィッシングのためにアメリカから移入したブラックバスやブルーギルが兵庫県の東条湖に放流されて、それが兵庫県内に沢山ある溜め池で繁殖していたのです。妻の実家が兵庫県にあることとも関連して、しばしば中国自動車道を使って息子と釣りに行きました。二人は釣った魚を食べたくなる性分でしたので、キャッチ・アンド・リリースはしませんでした。

その後、琵琶湖にブラックバスやブルーギルを放した人がいて、在来種に与える影響がでてきて問題が起りました。キャッチ・アンド・リリースというのは、外国から渡来した抑制心のある釣りのスタイルです。それは、アメリカの原産地でのブラックバスのリリースなら問題なかったですが、他の所へのリリースは生態系を攪乱かくらんさせてしまいますから輸入魚の放流にはもっと慎重でなければならなかったのでしょう。

(2012. 1. 1)



坂戸山と魚の幻想

大物釣り

夏休みに六日町の実家に里帰りした時には、父の自動車を借りて息子と二人で近くの釣り堀にニジマス釣りに出かけました。息子は30センチ位のニジマスが簡単に釣れるので驚喜していましたが、そのうちに息子の竿に大きなニジマスがかかり、強い引きで水中を暴れ廻り、息子は興奮の絶頂に達しました。やっとタモで上げると、50センチの大物でした。産卵用の池で飼育していた大物が釣り池の方に紛れこんでいたのでした。息子はこのニジマスを食べずに持って帰りたいというので、釣った小型のニジマスの方を釣り堀の食堂で料理してもらいました。塩焼きにして、サンショ味噌をちょっと

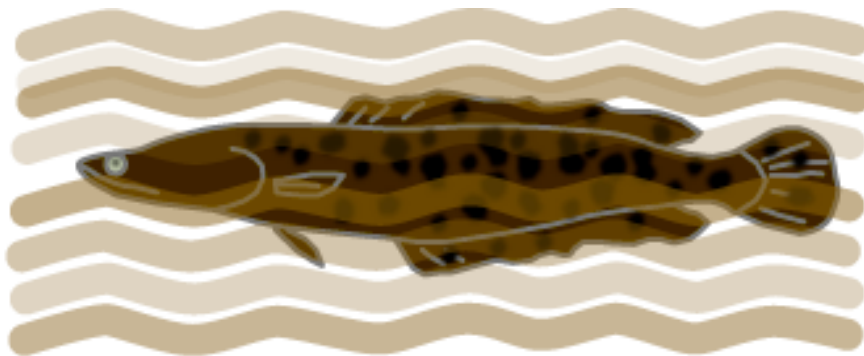
付けて食べましたが、最高でした。持ち帰った大物は、息子が剥製^{はくせい}にして壁に架けたいというので、剥製を作ってやり、息子の自慢の記念品になりました。

私がルアーフィッシングで釣った一番の大物は、宇治市の溜め池で釣ったライギョで85センチありました。このライギョはビニール性のアマガエルで釣ったのですが、息子の目の前で父としての腕前を見せることができました。そのライギョは熱帯魚の水槽で飼育して、水槽の上に板をのせ、その上にセメントのブロックを重石として置いていたのですが、ある日、ライギョが跳ね上がってそのブロックを転がり落とし、水槽の外に逃げだしていたのには驚きました。もの凄い力です。冷凍のワカサギを食べさせていたのですが、2〜3年するうちに、餌の量が不十分だったためか、身体が縮んで70センチくらいになってしまい、可哀想なので川に逃がしてやりました。ライギョの強靱^{きょうじん}な生命力には驚嘆しました。

若いころ、長野県の山中のヒュッテで開催された生物系学生のための夏期勉強会に講師として出席しました。そこで、ばったりと釣り好きの研究者O君と遇いました。彼も講師として来ていたのです。O君はどこに行くのにも釣り道具を抱えて行くことで有名なのです。さっそく彼に誘われて溪谷に魚釣りに行き、釣ったヤマメをヒュッテの人に塩焼きにしてもらいました。

その夜の飲み会では学生たちと一緒に釣り談義で盛り上がりました。O君がアメリカの研究集会に行ったときには、アメリカ在住の研究者T君^{ティー}を誘って海釣りをしたのだそうです。ところが、岩場で釣りをしていたときに大波がきて、T君が岩に叩きつけられて足の骨を折る大けがをしてしまい、ヘリコプターの出動になってしまったのだそうです。T君は京大のウイルス研究所で私といっしょに研究していた友達でしたから、その話を聞いてびっくりしました。そして、O君の「釣りキチぶり」はますます有名になったのでした。

(2012. 1. 2)



ホヤのサシミ

ある日、熊本市のデパートの地下食料品売り場に行くと、海水に漬けたホヤを売っていました。ホヤは東北地方では珍味として好まれているのですが、九州では食べる習慣がないようです。

店員に

「熊本でホヤなんか売れるのですか」

と聞いたら、

「さっぱり売れません」

とのことでした。

「もうすぐ閉店だから、明日になったら捨てなくてはならないですね」

というと、店員は焦って只みたい値段で全部売ってくれました。

私は以前仙台市でホヤのサシミを食べたことがあり、その旨さを知っていたのです。小さく切ったホヤの切り身を、袋状の体内から出てきた海水に浸けたまま食べると、日本酒の肴さかなにぴったりです。岩に付着したあのイボイボの突起がある袋状の形は不気味ですので、人はこのグロテスクの恰好かつこうを敬遠するのでしょうか。映画に出てくる岩に付いたエーリアンの大きな卵は、ホヤをヒントにしたのではないのでしょうか。

仙台市の居酒屋でホヤを食べていた人に向かって、

「ホヤは人間に近い動物だ」

と言ったら、その人はギョッとして箸の動きを止めていました。きっと、ホヤの外観から女性の子宮でも連想していたのでしょう。ヒトが属している脊椎動物せきついは、ホヤの属している原索動物げんさくから進化してきたので、タコや貝などが属する軟体動物なんたいよりも「ホヤはズーっと人間に近い動物」といえるのですが。

(2012. 1. 3)

コイ釣りとおユ釣り

熊本にいた頃、ドライブの途中、菊池川でコイ釣りをしている人たちがいたので、真似をして自分でもやってみました。餌はジャンボタニシをつぶしたものです。ジャンボタニシは養殖のために輸入したものが逃げ出して川や田んぼで繁殖していました。赤い

毒々しい卵塊^{あし}を葦やセメントの護岸に産みつけます。一時間の内に、40～60センチのコイを3匹釣り上げました。60センチのコイのときには、石で固定していた長い竿がコイに引っ張られて引っこ抜かれたのですが、危機一発、水際で竿尻^{さおじり}をつかみました。こうして子供時代の魚野川でのコイ釣りの雪辱^{せつじょく}を果たしたのです。

釣ったコイは味噌汁の「鯉こく」にして食べましたが、ジャンボタニシの変な匂いがしてあまり美味しくはありませんでした。やはりコイは釣った後にしばらく綺麗な水で飼育して匂い消しをしなければならないのでしょうか。カイコのサナギで飼育したコイの場合も綺麗な水で飼育して、匂い消しをした後で食べるのだそうです。

ドライブしていると熊本県の河のダムの上からアユの引っ掛け釣りをしている人たちが大勢いたので、私も真似をしてトライしてみました。リールの長い糸に何本ものアユ用の二股の引っ掛け針を結んでダムの下に垂らす仕掛けでした。ダムの下で水が渦を巻いているところにアユが群れているらしくて、良い場所を確保した人たちはつぎつぎに釣り上げているのです。特にダムの端のコーナーで釣っている人は最もたくさん釣り上げていました。引っ掛け釣りは単に糸を上下に動かすだけですから、アユの友釣りのような名人技は必要ないものと思われます。やはり場所の選び方が大切なのでしょう。後から来た私は場所が良くないのか、一匹も釣ることができませんでした。

アユは香りが良く食べたい高級魚ですから、アユを釣ってもキャッチ・アンド・リリースなどしたくはありません。そういえば、以前六日町にはアユの友釣りは好きなのに、アユを食べるのは嫌いで、釣ったアユを全部知人にくれてしまう奇人な人がいました。こういう友達を持ちたいものです。

(2012. 1. 4)

投網

投網^{とあみ}も経験しました。宇治市の溪谷で大きなウグイが一カ所に群れているのを見つけて投網で一気に全部捕まえました。産卵のために集まっていたのでしょうか、卵で腹がふくらんだ魚も混じっており、塩焼きや醤油煮で美味しくいただきました。

投網で70センチの大ナマズを獲ったこともありましたが、投網で大失敗をしたこともありました。木津川^{きづがわ}の流れの早い瀬でオイカワを獲ろうと投網をしたら、網が水に流されて網と一緒に瀬の深みに引きずられ込まれてしまいました。網の綱をしっかりと右手首に巻き付けていたので網を離すこともできず、深みで溺れかかってしまいました。

その後どんどん浅瀬まで流され危機一発で助かりました。「京大助手 木津川で溺死^{できし}」という新聞記事になるところでした。

私が子供の頃、魚野川に潜ってサケを鉄のカギ棒で引っ掛けて捕まえようとしていた男が、誤って川の中の杭にカギ棒の先を打ち込んでしまい、そのカギ棒を紐でしっかりと手首に縛っていたため、水死してしまった事件がありました。父がその検死に立ち会いました。魚獲りには危険がいっぱいです。

(2012. 1. 5)

ろ 船の船

学生時代の夏には、能登半島の九十九湾^{つくもわん}にある金沢大学の臨海実験場に泊まり込んで海洋生物学の実習を行いました。実習の合間に船^{ろせん}の漕ぎ方を独学で覚えました。船尾にある船^{ろべそ}とよばれる突起に船の穴（入れ子）を差し込んで、船の進行方向に対して横向き立ったまま両手で船^{ろうで}腕を握り、長い船を旨く左右に漕ぐと船が前進します。このとき船腕を握った手首の動かし方が大切なのですがビデオでもないと説明は難しい。そしてまっすぐに進むためには、腕を前に押し出したり、引いたりするときの力のバランスが大切です。船と船は船^{ろづな}綱で連結しておきます。この実習期間に船の漕ぎ方を覚えたことで、後に命拾いをしたのです。

それは下宿の若主人と二人で河北潟^{かほくがた}に船でフナ釣りに行った時のことです。その日はめちゃめちゃ釣れて二人で100匹程釣りました。もっともそのうちの90匹程は若主人が釣ったのです。私は合わせ方が下手なのかあまり釣れなかったのですが、若主人が次々に釣るので、私は若主人が操る二本の竿^{さお}の釣り針にゴカイを付ける係に任命されたのです。確かにその方が効率的で良く釣れました。

ところが午後からにわかには風が強まり、湖面に白波が立ち、潟湖が外海のように荒れてきて、若主人が必死に船をこいでも船はどんどん反対方向に流されました。台風が近づいていたのです。私たちは絶体絶命のピンチに陥りました。しかし、「僕が代わりに漕いで見ます」と申し出て、船を漕ぐと船は荒波をどうにか乗り切って船着き場にたどり着くことができました。これで一変に私は株を上げ、ゴカイの針付け係から、船の船長に昇格したのでした。下手をしたら、「河北潟台風下の釣り 二人遭難」などという新聞ダネになるところでした。

(2012. 1. 6)

魚の研究

熊本大学の医学研究科の新部門の教授に就任して研究室を立ち上げた頃、本職の大腸菌を使った分子生物学の研究のかたわら、ヒトの高脂血症患者の病因遺伝子のクローニングやヒラメの成長ホルモンの遺伝子のクローニングなども行いました。ヒラメの成長ホルモン（蛋白質の一種）の話は熊本県水産試験場から依頼されたのでした。天草半島にある熊本県水産試験場ではそれまでに、高級魚のヒラメやシマアジやタイの養殖に成功していました。成長ホルモンを稚魚に与えて成長を早くして、出荷を早めたいという企画でした。成長ホルモンを水に溶かしておく^{えら}と、魚の鰓から吸収されて成長が早まるというサケでの報告がアメリカの科学雑誌に載っていたとのことでした。成長ホルモンは種によって少しずつ異なるから、ヒラメにはヒラメの成長ホルモンが必要です。ヒラメの成長ホルモンの遺伝子を大腸菌の中で増やして、成長ホルモンを大腸菌に大量に作らそうという計画です。

この研究を助手の M 君が担当することになりました。成長ホルモンは脳下垂体で作られているので、先ず何十匹もの生きたヒラメの頭を切り落として脳下垂体を取り出すと直ちにドライアイス・アセトンを使って凍結させます。そしてその脳下垂体よりメッセンジャーRNA を抽出しますが、メッセンジャーRNA は非常に壊れ易いので注意が必要です。このメッセンジャーRNA を基に試験管内で DNA を合成させて、それをプラスミド DNA に挿入して大腸菌の中で増やします。多数のクローンの中から、特殊な方法を使って成長ホルモンの遺伝子のクローンのみを選びだします。そして、DNA の塩基配列を解析して確認を行うのです。このクローニングに成功し、英文の論文にして発表しました。

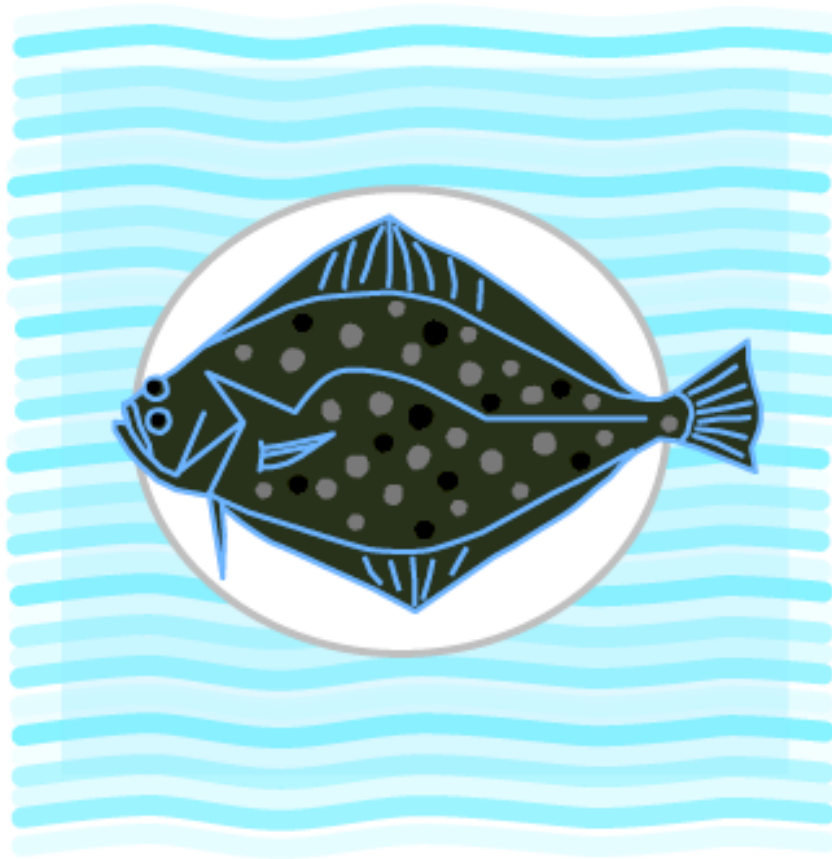
頭を切り取った残りの身体をたくさん氷詰めにして M 君は天草から車で持ち帰りましたが、私たち教室員の家族だけではとても食べ切れる量ではありませんので、M 君は大学病院の看護婦さんなどにも声をかけて配給しました。ヒラメは食べられる高級魚ですから実験後の余禄がありました。私たちはこういう余禄を狙い、「次にはイセエビの成長ホルモンのクローニングをしよう」などと冗談を言っておりました。食べられる実験材料を実験に使っている研究者がうらやましいです。医学部で大勢の研究者が大量に使っているマウスもこの点ではダメですね。ひょっとするとマウスの方は工夫すれば食べられるかもしれませんが、私たちが研究している大腸菌の方は絶望的です。

ヒラメの成長ホルモンの遺伝子のクローニングのことで熊本県水産試験場の人たち

と交流を深めていたころには、しばしば新鮮なヒラメやシマアジやタイが送られてきて、研究室でサシミにして皆で堪能しておりました。シマアジはヒラメに負けないほど美味しい高級魚でした。シマアジやヒラメに比べるとタイは一寸格が下がるように感じました。

シマアジは成長すると1メートルにもなります。水産試験場では、水槽で或る程度大きくしたシマアジを実験的に湾内に放流しました。外海を回遊して更に大きくなって湾内に帰ってくることを期待していたのです。「これこそ、男のロマンだ」と試験場の人たちは意気揚々としていたのですが、その後この放流を釣り人が聞きつけて湾内のシマアジをつぎつぎに釣り上げてしまい、水産試験場の人たちは憤慨しておりました。「釣り人」という人種は狩猟本能丸出しでぶったくりをしてしまいます。まして超高級魚のシマアジと聞いたら、とても放置して置けなくなる気持ちは良く分かります。狩猟本能を食欲がぴったりと後押ししていますから。

(2012. 1. 7)



ヒラメ

釣りの楽しみ方

釣りの楽しみは、実際に釣りをすることだけではありません。読書でも楽しむことができます。釣りの紀行文、釣り指南書、魚類図鑑、魚料理の本、魚類学の研究書、釣り穴場の地図などを見ながらいろいろ想像すると奥が深い楽しい世界が広がります。開高健の「フィッシュ・オン」や「オーパ！」など、釣りの楽しさ満杯の本がありますし、アイザック・ウォルトンの「釣魚大全」という古典もあります。

私は南米での魚釣りの写真集「オーパ！」に感激していたので、京都大学を退職後の南米旅行ではアマゾンでのピラニア釣りが入っているツアーを申し込んでいたのですが、そのツアーは希望者が少なく残念ながら取りやめになり、ピラニア釣りの無いツアーでブラジル、アルゼンチン、ペルーを回ってきました。このツアーでは魚のエピソードはありませんでしたが、イグアスの滝やマチュピチュではたくさんの蝶類を楽しむことができました。南米の蝶は日本の蝶と全く異なり、目新しいので興味があるのです。青光するモルフォ蝶や派手な色彩のドクチョウ、そしてそのドクチョウに模様が似た毒のないチョウなど面白い蝶がおり、蝶の進化についても話題が尽きません。

国立公園内では蝶の採集は禁じられていますから、昆虫網を持って行きませんでした。マチュピチュのインカ道の峠に皆で登った時に、添乗員に頼んで峠にいた監視員にスペイン語で質問して貰いました。「もし私がここで蝶を昆虫網で採集したら、あなたはどうしますか？」という質問です。監視員の答えは、「こんなに蝶がたくさんいるのだから、あなたが採集するところを私は見なかったことにします」ということでした。ユーモアの分かる好青年でした。

京都大学に就職して、京都に住むようになったころ、桂川でのマブナ釣りに凝っていましたが、最初のうちは、微妙な浮子の動きに合わせるコツが分からず中々釣れなかったのですが、工夫をするうちに徐々に上達しました。岸辺の葦中でのマブナ釣りは優雅なひと時でした。「釣りはフナで始まり、フナに終わる」などと言いますから、後期高齢者になった今、また桂川でフナ釣りでも始めようかなと思っています。

(2012. 1. 8)

「終戦日」シリーズ



終戦日の日本軍戦闘機

この六日町高校7期生のメーリング上では、原澤正さんが書いた新潟県における戦時中の日本軍用機墜落事故が話題になっていました。「土樽村茂倉山の麓、毛渡沢奥に日本軍用機が墜落し、搭乗員3人を土樽村の高波吾策さんが救助に向かった」ということです。飛行機の練習中、新潟港からの帰路川口市の上空で右に操縦桿を回し信濃川沿いに飛ぶべきところ誤って魚野川方面に飛び、突然目の前に立ちふさがった高い山脈に衝突してしまったのがそうです。高波さんは登山のベテランでした。

私も日本軍の戦闘機のことでは少々気にかかっていることがあります。それは1945年8月15日の終戦の日のことです。昭和天皇の玉音放送のあった午後のことでした。六日町の上空を日本軍の戦闘機が1機長岡方面に向かって飛んで行くのを見ました。その日は日本晴れで、飛行機は高空をキラキラ光りながら飛んでいきました。私は飼育していたウサギの餌にする草を刈るために魚野川の土手に立っていたのです。

その後いろいろな本を読み、終戦の日には絶望した特攻隊員たちが自分の飛行機に乗り、海の中に突っ込んで自殺していったことを知りました。そして、私が見た飛行機もその中の1機だったのではないかと思うようになりました。新潟県の故郷の上を一度見納めに飛んでから自殺したのではないかと想像していたのです。

皆さんの中で、終戦の日の午後、この飛行機を見た方はいないでしょうか。あるいは、この日、日本海に日本軍の戦闘機が1機突っ込んでいったという情報を知りませんか。

原澤正さんによれば、土樽村に墜落した飛行機を操縦した若い少尉クラスの指揮官は、土樽村を去る時の挨拶で「国の大切な飛行機を失ってしまいました。私はこれから特攻隊に志願し、必ず国のために尽します」と直立不動の姿勢で敬礼をしたということです。

その後この人は実際に特攻隊に入り、終戦の日に飛行機で土樽村の墜落事故現場の上を飛び、六日町を通過して日本海に突っ込んで行ったのではないかと私は推察しています。まるで小説になりそうなストーリーですが。

皆さんはあの終戦の日には何をしており、何を考えていましたか。皆さんの終戦にまつわるエピソードをお聞かせください。私たちは、日本のあの劇的なターニングポイントを経験し覚えている最後の世代でしょうから、子孫のためにも何か書き残しておくことが必要ではないでしょうか。

<追記1> 昨日インターネットで調べていたら、「特攻隊教官が、終戦後郷里で自爆！」というサイトを見つけました。^{かんじやくよし}神社澄さんは石川県の小松基地より飛行機で飛び立ち、倉敷市の生家や母校の小学校の上をすれすれに飛んだ後、生家の墓を目掛けて急降下して近くの田んぼに突っ込んだとのこと。生家の上を飛んだ時には、母親は息子の顔を確認して、「きよしだ、きよしだ」と叫んだそうです。遺書には、戦友が戦死したのに自分は生き残ってしまったことを申し訳なく思い自殺することが書かれていました。

インターネット上には特攻隊の死亡者名簿などもありましたが、終戦後に自爆した隊員たちの名は名簿には残っていないようでした。自爆した人たちも、やはり特攻で戦死した隊員と同様に戦争の犠牲者だと思うのですが。

<追記2> 終戦の日に日本軍の戦闘機の飛んでいるのを見たことは、2001年に六日町文化会館で開催された「南魚沼のフェアブル 昆虫少年物語」出版記念講演会で講演したときに話しました。また、このときの講演内容を平賀壯太著「生物の惑星」（太陽書房）という絵本にして出版しましたが、あの戦闘機のことを挿絵付きでこの本の15～16ページに書いておきました。

(2012. 1. 9)

湯本三郎さんの「終戦の日」

平賀壯太さんとは交流がありませんでしたが、故中島賢一郎君からよく平賀君が、平賀君がと話は聞いていました。今回のメールの最後に「平賀壯太著『生物の惑星』（太陽書房）という絵本にして出版しましたが、あの戦闘機のことを挿絵付きでこの本の15～16ページに書いておきました」とあったので、投稿する気になりました。「生物の惑

星」(太陽書房)と「透明なノート」(新風社)の2冊を購入して読みました。どちらも平賀さんの独創的才能のあふれる本ですが、私は「透明なノート」の絵と色彩感覚に衝撃を受けました。平賀さんは画家としても成功したのではと思いました。

ついでに、終戦の日に何をしていたか？ わずかに覚えていることは何か異常なことが起きたということ、家にラジオなど無かった頃ですぐ近くの家で訳の分からないまま、玉音放送を聞きに行ったことは覚えています。その後何百回と繰り返された昭和天皇の声はあの時聞いた声だったと・・ほったらかしの親が家に帰れと迎えに来た異常さを感じられました。

終戦の日の飛行機には記憶がありませんが、長岡市の空襲の日は家の真上をB29が超低空でとび、まるで飛行機で空がおおわれた様な印象を受けています。その後、我が家の北の方に何時までも、何時までも空襲で空が明るく、子供心にもその異常さは感じられました。

小学校3年と言うと、田んぼ仕事全般、雪かき、雪道つけ、水くみ等々、一人前を期待され始めた年ですが、夢中で遊びたい年頃でした。

(2012. 1. 9)

高橋一哉さんの「終戦の日」

のん気坊主の私には終戦の日のことは平賀君のような鮮明な記憶はありませんが、あの日の午後の飛行機のことには覚えておりました。我が家にもラジオは1台ありましたが故障しがちで、15日の正午の放送は隣の松屋さんに祖父母、母と弟と一緒に聞き聞きました。しかし雑音ばかりの音声で私には何のことやらさっぱり分かりませんでした。家に帰ってから母が涙ぐみながら教えてくれましたが、もう爆弾が落ちてくる心配も無いし電灯も覆い^{おお}をとって明るくしていいんだと何か嬉しい気分になった記憶がありません。

その後、近所の仲間といつものように裏の川(魚野川)に泳ぎに行きました。その時確かに平賀君の見た飛行機がかなりの高空を青空の中キラキラ光ながら飛んでいったのを見ました。もう終戦直近の頃は時々爆音をたてて通り過ぎましたが、初めの頃は泳いでいてもあわてて川岸の木立や草むらに隠れたりしましたが、そのうちに慣れて気にならなくなり川の中から空を仰いで眺めておりました。私の記憶はそのへんまでで、あの飛行機が敗戦に絶望した若者の最後の飛行だったのではないかなどと思いをさせることは後のちもありませんでした。

(2012. 1. 9)

平賀壯太の「終戦の日」 1

やはり、終戦の日にあの飛行機を見た人はいたのですね。

あの飛行機は非常に印象的でしたが、そのときには「戦争が終わったのにどうして飛んでいるのだろう」と思っていました。土樽の辺で見た人はいないでしょうか。墜落事故現場の上を旋回したのではないかと想像しています。

(2012. 1. 9)

原澤正さんの「終戦の日」

1. 土樽に不時着した陸上攻撃機の、あの若き指揮官の名前が解らず残念です。インターネットには特攻隊名簿があるようですが、長岡出身の乗組員原伍長の名前は解ったのに。本当に特攻隊員になれたのか、1年後の終戦を無事むかえて除隊したものか、全く解りません。平賀さんの言われるようなストーリーもあったかもしれませんね。終戦の日の戦闘機は、土樽では飛ばなかったと思います。爆音もなく、蒸し暑い静かな日でした。六日町上空に飛来した戦闘機は、高橋一哉さんも見たとのこと、何処から来たものか大変興味がありますね。1機だけというのが何か意味がありそうですね。

ところで、不時着機の件で追加することとして、実はあのヒッコリーの本田君は高波吾策さんと同じところの鉄道官舎に住んでおり、幼少の頃から高波さんからスキーを教えられ、可愛がられてきました。3人の搭乗員が生還して村に入って来た時に、子供ながら迎いに出て「兵隊さん、ご苦労様です」と大きな声で言ったそうです。本田君から高波さんについてはまた語られると思います。その後不時着機の機体はどのように処理されたのか、現在もその残骸があるのか不明です。

2. 昭和20年8月15日、終戦の日の記憶として、小生は子供ながら戦意^{こうよう}高揚の時節でもあり、十分な戦意を持っていました。天皇の玉音放送を我が家に人が集まってきてラジオで聞いたが、雑音が大きかったのと、言葉が聞き取れず、何だか分けがらなかったが、戦争に負けた事は解った。その日小生は、祖父の手伝いで、畑の中の木の根を取り除く仕事をしていましたが、戦争に負けた事に落胆して、身体の力が抜けてしまい、やたらにダルさを感じ、今でもあの時の手足のケダルサを覚えています。小生は仕事の手を止めては道を通る人に「日本は戦争に負けたよ」と話しました。残念で黙って居られなかったような気がします。今思うと軍国教育を受けた、子供ながらに戦意を持った、素

直な軍国少年だったのです。しかし、この日の記憶は人それぞれ、全く別々なのかも知れません。

(2012. 1. 10)

上村文平さんの「終戦の日」

あの夏の暑い日の思い出は、村のため池で泳いでいたのです。我が家にはラジオは無かったので親戚の家に家族が出掛けて行った事を記憶しています。

村の神社で遊んでいると、近所の家^{じい}の爺さんが山から帰り、マムシを2匹捕まえてきて皮をはきながら「日本が負けるはずがない。これを食べてもう一度戦うのだ」と云って息巻いていた事を思い出します。この御爺さんの息子さん夫婦は戦後引き揚げてきましたが、子供は死んでしまったようでした。

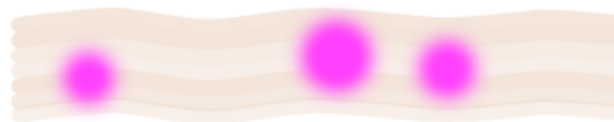
(2012. 1. 10)

平賀壯太の「終戦の日」 2

あの日、3歳上の兄が天皇の玉音放送を聞きにラジオのある隣家に行きましたが、父は患者の診療があったので行きませんでした。しかし、帰ってきた兄の話は要領を得ないものでした。そのうちに、六日町小学校で何か軍事訓練をしていた町の人たちがぞろぞろと帰ってきました。そして「日本は戦争に負けた」という噂が伝わってきました。その後でウサギの餌の草刈りに行き、あの飛行機を見たのです。

学校の軍国主義教育にはまだあまり染まっていなかったようで、戦争が終わったことにほっとして、むしろ嬉しかったのです。学校を卒業すると赤紙が来て戦場にかり出されて戦死する人生など、夢も希望ありません。やりたいことは沢山あるから、戦争など嫌だと思っていました。行く手に立ちこめていた黒雲が、終戦によって一気に吹き飛んで晴れ上がったような開放感を感じ、これからは自分の力で未来を切り開いて行けると希望に燃えていました。そして、世界の人たちと友達になりたいとも考えていました。

(2012. 1. 12)



海行かば

「海行かば水漬く屍 山行かば草生屍」

町にはこの歌が頻繁に流されており、戦局はどう見ても劣勢になり悲壮感が漂っていました。

六日町小学校の体育館で、一人の少年が皆の前で

「これから自分は予科練に入り、お国のために戦います」

と挨拶しました。小学校を卒業したばかりの先輩でした。女の先生たちは泣いていました。予科練(海軍飛行予科練習生)になった少年たちは飛行操縦の訓練を受けたあと、特攻隊員になり多くの隊員が玉砕したのです。2500人以上が特攻で亡くなったそうです。

叔父(母の弟)に赤紙がきて、出征しなければならなくなりました。叔父に長男が生まれたばかりでした。皆と一緒に六日町駅まで叔父を送って行きましたが、プラットホームに入ってきた汽車は満員で、叔父は窓から中に押し込まれました。日の丸の旗や「祝出征」の幟を持った町の人たちが万歳を叫んでいましたが、私は叔父と叔母と赤ん坊の顔を見比べ、とても万歳などする気持ちにはなれなかったのです。

その叔父は中国で戦死しました。8月15日終戦の日のことでした。朝食を作るために飯盒を下げて塹壕から出たところを狙撃されたとのことでした。復員して帰ってきた戦友に父が会いに行き聞いた叔父の戦死状況の話です。(未送信)



軍国主義教育

テレビで北朝鮮の軍隊や政治などの映像を見ていると、戦争中の小学校における軍国主義教育を思い出します。

皆さんは国語の教科書にあった「宮城」の詩を覚えていますか。

「ザック ザック ザック ザック ヘイタイサンノアシオトダ」

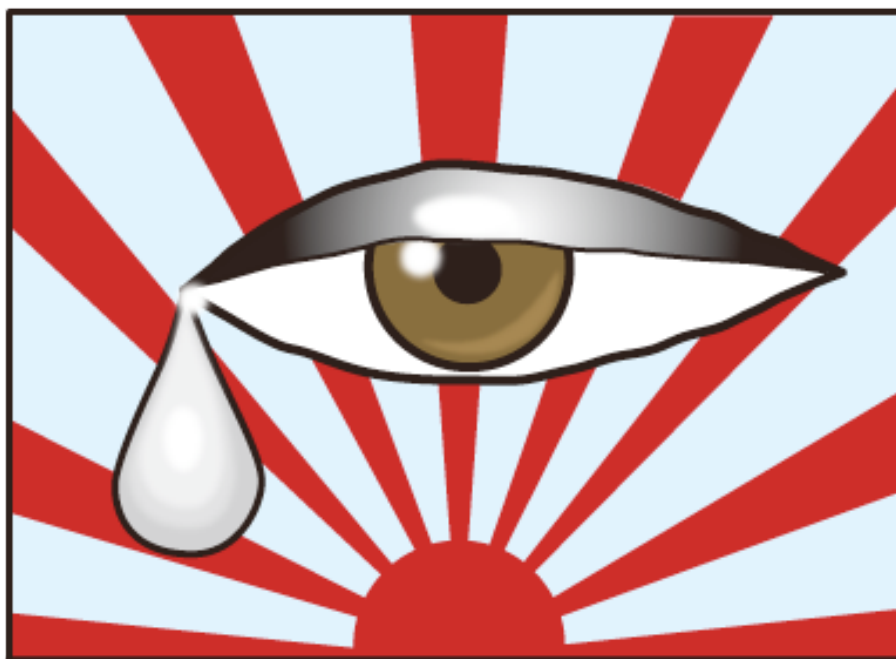
という詩です。その詩を朗読するとき、「宮城」という言葉のところまで来ると担任の女の先生が「気を付け！」と号令をかけるのでした。このような先生を「変だなー」と思っていました。

学校の式典の時には、全員が起立して黙禱^{もくとう}を捧げている中で、モーニングを着た校長先生が白い手袋をして体育館の舞台の後にある扉を厳^{おごそ}かに開けると白い馬に乗った昭和天皇の写真が飾ってありました。校長先生はうやうやしく木箱を取り出し、巻物の教育勅語^{ちよくご}を読むのですが、何のことだかさっぱり分からない変な文章でした。

その一部始終を上目使いでじっと観察していました。舞台の横に整列している先生たちは真面目に黙禱^{もくとう}をしていましたが、この式典のあまりのぎょうぎょうしさには、子供心にも滑稽^{こっけい}さを感じていました。そんな訳で、なかなか軍国少年にはなれない子供だったのです。

そして、終戦後に教科書を墨^{すみ}で塗りつぶしたとき、権威の崩壊を目のあたりにして、何事も批判的に自分で考えなければならないと思ったのです。このとき芽生えた批判精神は今でも続いています。

(2012. 1. 13)



戦争の惨禍

「変なアメリカ人」シリーズ (続)



アメリカ人と枯葉剤

アメリカに留学した1970年はベトナム戦争の真最中でした。研究室でポストクのP君（博士）と話をしているときに、日本では水俣の水銀中毒事件などの公害問題が大きな社会問題になっていることを話すと、P君は

「その公害問題を追求しているのは市民側なのか、それとも政府側なのか」と質問してきました。それは意外な質問でした。

「公害を起こしたのは政府がサポートしている大会社であり、それに抗議しているのは被害者と市民側である。大会社と政府の無策が被害を大きくしたのである」と答えました。

すると、P君が言いました。

「アメリカの公害問題は日本とは異なる。アメリカでは大気汚染を問題にして、それを減らそうという運動を今推進しているのは政府である。政府はベトナムでアメリカ軍がやっている戦争から市民の目を反らさせるために、国内の大気汚染を問題にしているのだ。アメリカ軍がベトナムで行っている枯葉剤作戦こそ環境破壊の最たるものである」

P君はカバンからパンフレットを取り出して一部くれました。P君たち科学者の政治運動家グループが作成したパンフレットだそうです。その表紙はベトナムのジャングルに空爆による大きな丸い穴が沢山空いている写真でした。このパンフレットでは、アメリカ軍の空爆や飛行機からの大量の枯葉剤散布によって環境が破壊されていることを告発していました。特に枯葉剤に大量に含まれる強毒のダイオキシン類により、被曝した人や動物が奇形児を産む確率が高くなる危険性が書かれていました。そこには、「ダイオキシン類はさいきけいせい催奇形性が高い薬剤である」という動物実験の結果を示した京都大学農学部教授の論文が引用されていました。

長引くベトナム戦争でのアメリカ兵の戦死者の増加に伴い、アメリカではベトナム戦

争に反対する世論が高まり、スタンフォード大学でも教官と学生たちによるストライキが行われて、大学構内の広場では抗議集会が開かれました。カリフォルニア州立大学のバークレー校などでもストライキが行われているとのことでした。そしてついにアメリカは十年以上続けたベトナム戦争から撤退せざるをいなくなったのです。

その後、実際にベトナムでは早産、流産、奇形児が産まれる頻度が増加したという多数の論文が発表されました。また帰還したアメリカ軍人のなかにも体調の異常を訴える人が多数出てきました。退役軍人の妻からは先天的奇形児が産まれる頻度が増加しているという報告もあるとのこと。枯葉剤を被曝した兵の精子に異常があるためだと言われています。

ベトナムはフランスの植民地だったのですが、1945年にベトナム民族共和国として一応独立しました。しかし、フランスは再び植民地にしようとベトナムに侵攻しました。ところが、激しいベトナム人民軍の抵抗を受けて、1954年にフランスの要塞^{ようさい}ディエン・ビエン・フーは陥落しました。そしてジュネーブ会議においてベトナムは南と北に分割されました。フランスに肩代わりして、アメリカはベトナムに介入して、南ベトナムに反共主義者でクリスチャンのゴ・ディン・ジェムを大統領にしたベトナム共和国を作りましたが、独裁的な傀儡^{かいらい}政権でした。アメリカがベトナムに軍事介入したのは1961年でした。枯葉剤を使い出したのも1961年だとのこと。1964年にはジェム政権は軍事クーデターで倒されてグエンカーン将軍が権力を掌握^{しょうあく}しました。そしてアメリカは北爆を開始しました。1968年1月30日の民族解放戦線側のテト攻撃によりサイゴンのアメリカ大使館は一部占領されました。

アメリカ軍がベトナムから撤退したのは1973年でした。そのあともアメリカに後押しされた南ベトナム政府軍は民族解放戦線側と内戦を継続していたのですが、1975年について民族解放戦線によってサイゴンが陥落させられ、評判の良くなかった南ベトナム政府（ズオン・バン・ミン大統領）は無条件降伏し、南北が統一され、サイゴンはホーチミン市に改名されました。正に30年に渡る長い戦いの後にベトナムは真に独立したのでした。

アメリカのベトナム介入はケネディ大統領のときに行われ、次のジョンソン大統領は軍事介入を更に強化し、ニクソン大統領の時にアメリカはベトナムから撤退しました。このアメリカのベトナム戦争では300万人のベトナム人が死亡、400万人のベトナム

ム人が負傷、5万8千人以上のアメリカ兵が死亡、3520億ドルの費用がかかったそうです。785万トンの爆弾を空爆で落とし、7500万リットルの枯葉剤を南ベトナムの森林、農村、田畑にばらまきました。ジャングルを枯らし、田畑で農作物を作れなくする目的でした。第二次世界大戦でアメリカが各戦場に落とした爆弾の総量は約205万トンでしたから、それに比べるとベトナムに落とされた面積当たりの爆弾は大変な量だったのです。この爆撃で多くの学校、病院、教会、民家が破壊されました。枯葉剤では人や動植物に多大な被害が及んだことと推察されます。ダイオキシンは安定な物質であり、その後遺症は長く続き、土地の汚染除去にも多大な費用と人力が必要でしょう。そして、日本もアメリカ空軍の発進基地として、このベトナム戦争には深く^{かたん}荷担していたことを心に深く留めておかなければなりません。

ベトナム人には、フランス植民地時代からの「他民族の支配を受けずに農耕をして暮らしたい」という明確な目的があったのだと思いますが、アメリカ人にとってはこんな犠牲を払ったベトナム戦争とはいった何だったのでしょうか。

(2012. 1. 14)

アメリカ人とベトナム人

京都大学での研究を終了して退職してから、妻と二人で海外旅行のツアーに参加できるようになりました。ベトナムとカンボジアを回るツアーではハノイ市の観光の後で、ホー・チ・ミン市（元サイゴン市）の観光をして、近傍のクチ村に行きました。

ベトナム戦争中にはこの村はクチ解放戦線として南ベトナム軍とアメリカ軍とを相手に^{かかん}果敢に十年も戦ったのでした。村のあちこちに空爆で受けた大きな穴がありました。村の入り口には、撃墜したアメリカのヘリコプターが記念品として置かれていました。この村の地下にはトンネルが蟻の巣のように^{じゅうおうむじん}縦横無尽に^{めぐ}張り巡らしてありました。地下トンネルの入り口は人が一人やっと入れるくらいの小さな穴で、その穴は板で蓋をされて、更にその上に落葉でカモフラージュしてあるので見分けが付きません。狭いトンネルは小男が中腰でやっと歩ける程で、もしアメリカ兵に見つかっても身体の大きなアメリカ兵は中に入れそうもありません。トンネル内をちょっと這いずっただけで、腰と膝が痛くなってしまいました。トンネルの中には所々に4～6畳位の小さな部屋が作ってあり、作戦会議や生活等に使ったのだそうです。こういう部屋には入口の直ぐ横に落とし穴があり、下には竹串が針地獄のように沢山挿してありました。アメリカ兵は敵の部

屋に侵入すると直ちに横の壁に背中を付けて身構える習性があるので、この落とし穴に落ちて串刺しにされてしまうはずですが。地下の換気のための空気穴は地面の蟻塚の中に開けてあるので見つかったことはなかったとのこと。トンネルは全て手作業で鍬とか手シャベルで掘られたのだそうです。トンネルを掘った土を地面に置いたら敵に気付かれてしまうので、川縁の崖まで伸びたトンネルの中を歩いて土を運び、そこから小舟に乗せて夜中に遠くの川底に捨てていたのだそうです。

クチ解放戦線の戦士というのは元々農民ですから、農耕をしながらこういう地下トンネル内で十年以上も暮らし、ときどきトンネルから出てはアメリカ軍や南ベトナム軍を襲撃していたのです。アメリカ兵はこの神出鬼没のベトナム解放戦線の戦士の襲撃に恐怖していたのだそうです。このトンネルの案内をしてくれた青年は、「自分はクチ解放戦線戦士の子孫です」と誇らしげに自己紹介していました。アメリカ側の見方から言えば「テロリストの子孫」ということになるのですが、実際はそうではないでしょう。

このトンネルの中での長年の農民の生活を想像し、ベトナム農民になった気持ちでいると、アメリカ側から見ていたこととは全く異なる面が見えてきます。圧倒的なアメリカ軍の物量作戦と最新兵器に対して、貧しいベトナム人が如何に固く執拗に戦うことができたのかということが理解できるようになってきました。アメリカがベトナム戦争に介入したときの理由は、「共産主義がドミノ倒し（将棋倒し）のように次々と広がって行くことを食い止めるため」でした。当時マスコミには、ベトナム戦争を「共産主義国家（社会主義国家）と自由主義国家（資本主義国家）の代理戦争」とする捉え方が多かったのですが、実際にはベトナムの古くからの歴史を知れば「フランス植民地からの脱却に続くアメリカの支配からの独立運動」として捉える方がより正しかったように思われます。どの国も他国の支配を受けずに自分たちで自分たちの政府を選び政治を行う権利があるからです。しかし、アメリカは軍事介入でそれを妨害していたのです。大義は、「他国の支配を受けなくて農耕をして暮らしたい」というベトナム農民の側にあったのです。

このベトナム戦争によってアメリカは多くのことを学んだはずだから、もう失敗はしないだろうと思っていました。しかし、最近のアフガニスタンやイラクでのアメリカの行動を見ていると、どうもそうではないようです。

(2012. 1. 15)

アメリカ人とイラク戦争

2003年の初頭に、アメリカから一通のEメールが送られてきました。古くからの友人であるアメリカ国立衛生研究所（NIH）に務めているアメリカ人のY教授からでした。

当時、ジョージ・W・ブッシュ大統領はイラクに侵攻^{しんこう}するために着々と戦争の準備を進めていました。1991年の湾岸戦争後にイラクが受諾した停戦決議にあった「大量破壊兵器不保持」をイラクが破っているという疑惑がその侵攻の理由でした。イラクからは、大量破壊兵器等作っていないという分厚な報告書が国連に提出されていたのですが、ブッシュ大統領やネオコンの政治家たちがそれを信用せず、フランス、ドイツ、ロシア、中華人民共和国の強い反対にも聞く耳を持たずにイラクに侵攻しようとしていたのです。

NIHの友人からのメールは「イラク侵攻に反対である」ことをホワイトハウス宛に皆でEメールを送ろうという趣旨で、私にもこれに協力して日本人にこのメールを転送してほしいということでしたので、知人たち宛にこのメールを配信しました。アメリカ政府が正にイラクに侵攻しようとしている時に、このような運動をしていたアメリカ人もいたのです。少数派ながら勇気ある行動です。

2003年3月に米・英は「イラクの自由作戦」と銘打って侵攻を始めたのでした。結局、大量破壊兵器もそれを作る工場も見つからなかったのですが、ブッシュは「独裁者のフセインを倒したのだから良いだろう」などと嘯^{うそぶ}いていました。独裁者を倒すのはその国の国民がすべきことで、外国の軍隊が勝手にすることではないでしょう。イラクがアル・カーイダを支援しているという侵攻の理由の一つも嘘だったのです。気に入らない国には先制攻撃をかけても構わないなどという身勝手な考えをネオコンはしていたのですが、アメリカの侵攻がイラク国民に与えた甚大^{じんたい}な被害を無視しているアメリカにはやはり納得できません。

また、米軍が先の湾岸戦争で砲丸、弾丸として使った劣化ウラン弾のために放射能で汚染されて、イラク各地の住民に白血病、癌による死亡率が増加していますが、これにもアメリカは頬かむり^{ほほ}をしています（森住卓著「イラク 湾岸戦争の子どもたち——劣化ウラン弾は何をもたらしたか」高分研）。イラクには広島に投下された原爆の1万4

000倍から3万6000倍の放射能原子がばらまかれたとのこと。湾岸戦争中にアメリカの鷹派政治家が「劣化ウランでイラク中を放射能で汚染して、人が住めない土地にしてしまえ」と乱暴なことを言っておりました。ベトナム戦争のときの枯葉作戦と同じ感覚です。そこに暮らしている人々に対する人間的な感覚が欠如しているのです。以前ベトナム戦争のときにスタンフォード大学のP博士が言っていたように、「戦争こそ最大の環境破壊」なのです。

湾岸戦争から帰国したアメリカ兵が癌や白血病にかかり、奇形児が生まれることが多く、湾岸戦争症候群と呼ばれています。従軍した60万のアメリカ兵の内45万人が放射能に被曝しているとのことで、訴訟問題も発生しています。メソポタミア文化やバビロンの遺跡、遺構の文化遺産も無残に破壊されました。アメリカ兵はこういう世界の文化遺産の価値については無知だったのです。国連の2001年の報告書によると、「経済制裁によるイラクの死者の数150万人、内62万人が5歳以下の子供だった」とのことです。今回のイラク戦争によっても、甚大な被害がイラク国民にもたらされたものと思います。

アメリカ軍の侵攻でバクダットは呆気なく陥落してフセイン大統領が逃亡したとき、ネオコンたちは鼻高々で「イラクの復興の利権は、侵攻に協力しなかった国には渡さない」などと言っておりました。やはり噂通り、アメリカはイラクの石油の利権を狙っていたのです。ブッシュとアメリカの石油産業が密接な関係であることは前から良く知られていたことなのです（ブリザール／ダスキエ著「ぬりつぶされた真実」幻冬舎）。そして軍事企業に投資して国防予算を食い物にしている人たちが政治をコントロールしているのです（ダン・ブリオディ著「戦争で儲ける人たち」幻冬舎）。その後、イラクではイスラム教の宗派間の対立が激化して内戦状態になり、手が付けられなくなり、アメリカ軍はイラクから撤退せざるを得なくなりました。撤退後も内乱は続いて、イラクはカオス状態で現在に至っています。

「ブッシュ妄言録」（ペンギン書房／二見文庫）という本によると、大統領就任後のスピーチの無知、無教養、非論理性を如実に示すエピソードが沢山あります。ブッシュは訪日の際に、「日米は150年間も素晴らしい同盟関係にある」と言ったのだそうです。「素晴らしい同盟関係にある」国同士が真珠湾攻撃や広島・長崎に原爆を落とすというのでしょうか。ブッシュの頭からは第二次世界大戦のことがスッポリと抜け落ちていきます。こういう無教養な大統領やネオコンの言うまま、アメリカ政府に追従し、国

会における十分な討議もなしにイラクに自衛隊派遣を決めた日本政府もどうかしていたのではないのでしょうか。当時、日本政府の誰かが「アングロサクソン（米英）に取りあえず付いていけば間違いない」などと言っていましたが、もっと批判精神を持ち、自分の頭で考える政治をして貰いたいものです。外から無理押しされて否応無く従うのではなく、もっと自主的に考え日本の進路を決めていただきたいものです。アメリカを通じてしか世界を見ないのでは困ります。

個々のアメリカ人とは仲良くしたいですが、アメリカ政府のする変なことには付き合いたくありません。

(2012. 1. 16)



放射能の恐怖

あとがき

六日町高等学校7期生のネットワークを通じてメール配信をしていた私のエッセイをまとめて電子図書を作りました。

私たちは第二次世界大戦の終戦を体験して、それを覚えている最後の世代ではないかと思います。終戦はその後の私たちの人生の原点と言えるのではないのでしょうか。皆様の終戦日の記憶を投稿していただき、それを「終戦日」シリーズとしてこの電子図書に収録しました。協力して頂いた方々に感謝いたします。

本を印刷して自費出版するためには大層費用がかかりますが、電子図書は自分で無料作成することが出来ますから、商業目的でないならば便利な方法です。必要ならばCDやDVDに焼き付けることもできますし、紙にプリントアウトすることもできます。

以前から何かに書き残しておきたいと思っていたエピソードを電子図書としてまとめることができ、ちょっと人生の重荷を降ろしたような気持ちになっています。このエピソードの散歩道のそぞろ歩きを楽しんでいただけたでしょうか。

平賀壯太

(2012. 1. 22)

ブックデザイン・イラスト：平賀壯太